
空へ present from satan

BOC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空へ p r e s e n t f r o m s a t a n

【Nコード】

N9587F

【作者名】

BOC

【あらすじ】

8歳の誕生日。僕は信じられないプレゼントを贈られた。贈り主は、悪魔 普通の生活を送っていた一人の少年の運命が、異界の使者達によって狂い始める。その背景には遥か昔の悲劇があった…

…

プロローグ

僕の身体に異変が起こったのは、ちょうど八歳の誕生日を迎えた日だった。

僕は兄弟の長男で、とても可愛がられていた。僕の二つ下にアルフォンスという弟がいたけど、こいつは誰に似たのか、意地っ張りであまな性格で、僕とはあまり仲が良いとはいえない関係だった。

でも、父さんも母さんも僕とアルのことをとても愛していたし、僕らも、両親が大好きだった。とりあえずは、幸せな家庭を持っていたんだ。

僕の運命をまるごとひっくり返した、あの日が来るまでは……

誕生日の晩に、僕の八歳を祝う盛大な誕生パーティーが開かれ、たくさん村人が家に集まった。フィナーレに、母さんが作った特大誕生日ケーキが運ばれ、ケーキにささった八本の色鮮やかな蝋燭を吹き消すとき。部屋の灯りが消され、蝋燭の小さな炎の灯火だけになると、集まった人々がハッピーバースデーの歌を樂しげに歌った。皆笑顔で、天使でも見るように僕を見ていた。歌が終わり、母さんが耳元で蝋燭を吹き消すように囁いた。そのときの、優しく温かい声も、ちらりと見た笑顔もとても幸せそうで、僕にもその幸福感が伝染してにんまりと笑ったことを覚えてる。あのアルでさえも、美味しそうなケーキを前にして上機嫌なのか、僕にこっそりと笑いかけてくれた。僕も気前よく笑顔を返す。その瞬間だった。僕の首筋から背中にかけて、心臓が止まるほど冷たいものが、さあっと通り過ぎていったのだ。途端、その幸福感が揺らいで、少しづつ薄れていった。幸福感が完全に消えてしまわないうちにと、慌てて空気を小さな肺一杯に吸い込んだ。まさにそのとき、事は起こった。

八本の蝋燭の火が一斉に消え、部屋の中が真っ暗になる。声を上

げる暇さえなかった。

僕はまだ、息を吹きかけていない。

何がなんだか分からなくなっただけ、蠟燭を消しやすいようにと僕を抱き上げていた母さんの腕が小刻みに震え、指先に僅かな力を加えたのが分かった。

その場にいた全員が僕に注目していたから、僕が息を吹いていないことはすぐ解ったはずだ。それにその日は、風が強く冷えるので、家中の窓は全て閉まっていた。

部屋の中は、しん、と静まり返った。

この村には、ある伝説があった。

今から、一〇〇年ほど前のことだ。村に一人の男がやってきた。長旅でよほど疲れていたのか、村の門をくぐると男はその場で倒れ、気を失ってしまった。

男は幸運にも、人情深い村長の家へ運ばれ、村の者が順番に訪れ、手厚く男を看病した。それがよかったのか、男の容態は日に日に良くなっていった。ある日、ある若い娘が男の看病に行ったとき、一目見た瞬間二人は恋に落ちた。短い交際の後、やがて二人は結婚し子供も生まれ、幸せな日々が続いた。

しかし、男は、ある重大な秘密を持っていた。それは、秘密と同時、当時とても重い罪だった。男は、この世で最も邪悪な魔力を操る、魔術師だったのだ。そのころ魔術師は、人間の恥だと罵られ、たくさんの人々から批判されていた。その時代、魔女狩りこそやつ

ていなかったが、それと似たような魔術師の処刑は、頻繁に行われていたのだ。男はそのことを、愛する妻にも、親切にしてくれた村人たちにも黙っていた。言ってしまうえば、この幸せな日々は永遠に戻ってこないことを、知っていたから。

ところがその村で、感染症がやはりはじめ、村民は予防接種を義務づけられた。当然男も予防接種に行ったが、そのとき、男のたくましい腕に、魔術師になると付けられる焼印があるのが見つかったしまったのだ。それを見た医師はすぐに王宮に連絡を取った。家族とは、強制的に隔離されてしまった。

魔術師だと判明すると、男はすぐさま死刑になった。その場で魔法を使い、逃げることも出来たが自分にこれまでよくしてくれた人々を傷つけることを、どうしても男の良心は許さなかった。宣告をされたとき、男は己の力を振りしぼって百年に一人、その国に生まれつき魔術の能力を持った子供が生まれるよう呪いの予言をしたのだ。

「その子がちょうど八歳の誕生日を迎えるとき、ろうそくの火は消え、家族の絆は永遠に断ち切られるであろう。それはその子に悪魔が降臨した合図・・・呪われた魔術を操る子供が、生まれるであろう。そして、いずれこの世を支配し、滅ぼす存在となる！」

男は死に際にそう叫んだ。

その言葉は、人々を恐怖で震え上がらせた。この時代、魔術師の魔力がこめられた予言ほど、怖いものは無かったのだ。魔術師の予言が外れたことなど、過去ももちろん現在も、一度も無いのだから。

それは、今までずっと仲良く暮らしていた妻子に、魔術師とわかったただで見捨てられた深い深い悲しみと、どうして魔術師だけがこの世界に受け入れてもらえないのかという悔しさや怒りが入り混じった、強力な呪いだった。

そして今、この村に呪いの子が生まれた。

この僕が

第1部 第1話

「う、うわああ・・・呪いの子だあ！」

誰かが叫ぶと、皆悲鳴を上げたりわめき散らしたり大騒ぎだ。喚きながら慌てて扉のほうに行き、人の波に押されて吹き飛んだ人もいる。とにかく皆、恐怖と怒りに肩を震わせながら外へ、あるいは宮殿に電報を出すためになだれ込むようにして家から出て行った。

あつという間に、ノードリー家は家族がいなくなった。といっても母のクラリスはパニック状態、父のフレッドもポカンとして状況がのみ込めていないようだし、弟のアルは軽蔑しきった目を兄に向け、口を半開きにして啞然としている。

「うそ！ これは夢よ！ うちの子が魔術師だなんて・・・！」

クラリスがヒステリックな声を上げる。今にも泣き出しそうな顔だ。

「・・・そうだ・・・魔術師なら、何処かに焼印があるはず・・・！ アデル、こっちへ来なさい！」

クラリスがアデルを引き寄せ、身体のうちこちを調べ始めた。アデルはただ茫然として、されるがままになっていた。

自分が魔術師なんて信じられないはずなのに、不思議なことに、自分はそれをすんなり受け止めている。その受け入れている自分に驚いて、口もきけずに佇んでいた。

「　　っ・・・きゃあああ！」

クラリスの悲鳴がすぐ近くで聞こえた。どうやら、アデルの左肩に焼印を見つけたらしい。アデルは自然と、惹き付けられるようにして、その邪悪な印に魅入った。

十字架のような形のマークに、蛇に似た醜い怪物が撒きついており、周りにはアデルには理解できない文字が五つ、描かれていた。その毒々しい、真っ黒な焼印は、幼い子供の小さな腕には、とても不釣り合いで痛々しく、思わず目を背けてしまいそうなほど恐ろしかった。

「ああアデル。あなたって、本当に可哀想な子だわ。　ねえあなた！　この子、王宮に連れて行かれて、し……死刑にされてしまう……！　死刑じゃなくても、この国から追放されるわ。……こんなにも幼い子なのに……まだ、八歳になっただけだよ？　それも、ほんの数時間前は……七歳だわ」

クラリスはすでに泣き始めていて、死刑という言葉に身体を震わせた。フレッドは、まだショックから立ち直れないらしく、何の反応も示さない。それどころか、アデルのほうに顔を向けることさえしなかった。クラリスは、まだ手の付けられていない、特大の誕生日ケーキの乗ったテーブルに力なく寄りかかり、アデルの焼印を見てまた目に涙をためた。アデルはそんな両親の様子を見て、自分にとんでもない犯罪を犯した犯人になった気分になり、今この場から母の痛々しい視線から、消えてなくなりたいと思った。

それなのに、アデルの身体は、ピクリとも動かない。ただひたすら、心に突き刺さるような母親の哀れむ視線に、耐えるしかなかった。ノードリー家は、クラリスのすすり泣く小さな声と、それぞれの息遣いしか聞こえなくなった。

その沈黙を突き破るように、アルが今まで閉じていた重い口を開けた。

「いいじゃん。母さんも父さんも……なんでそんなに哀しい顔してるの？　兄ちゃんなんか、村から追い出せばいい。僕、呪いの子が兄ちゃんなんて、嫌だよ！」

クラリスは、驚きのあまりしばらく口がきけず、まじまじとアルを見つめた。少しして口が利けるほど立ち直ると、アルを今まで見たことのないほど厳しい目で睨み、幾分声のトーンを落として言った。怒りを抑えているような、かすれ声だ。

「なんてことを……言うんです……アルテミス」

相当怒っているのか、アルの本名を口にした。

「いくら呪いの子であっても、アデルは、正真正銘、あなたの兄ですよ。今すぐ、謝りなさい」

「嫌だね！ 兄ちゃんを早く追い出してよ！」

クラリスの目が大きく見開かれ、顔がアデルの焼印を見たときよりも蒼白になる。クラリスはしばらく怒りを必死に抑えるように、口を真一文字に結び、ひたすら息子を睨んだ。

「アルテミス・ノードリー。今すぐ、謝りなさい」

ゆっくりを言葉を選び、繰り返す。

「嫌だったら！ ……なんで母さんは兄ちゃんを庇うの？ 穢れた魔術師だよ！？」

クラリスの顔が突然歪み、目から涙が次々と溢れ出した。アルが、たじろぐ。

「け 穢れたなんて……そんな酷いこと、二度と口にしないで！」

涙声で、クラリスが振り絞るように懇願する。アルはクラリスの態度に呆氣に取られ、ただ困惑したようにおろおろと部屋と部屋の間に目を泳がせた。

フレッドは、今頃になってやっと状況が飲みこめてきたらしく、黙ったまま床に座り込んでしまったクラリスの手を引いて立たせ、椅子に座らせた。それから、クラリスの小刻みに震える肩を優しく気遣うように撫で、アルを怒りをこめた視線で睨むように一瞥して、それからアデルへ顔を向けた。しかしアデルは、父親の顔をまともに見れなかった。

その瞳にどんな感情があるのか、知ってしまうのが、怖い。そう思ってる自分がいた。

もし、いつもの温かい、包み込んでくれるような瞳じゃなかったら、哀れみや励ましの感情以外のものがその目にあったとき、それを見してしまうのが、泣きたくなるほど、怖かった。

だからさつきと同じ方向を、その青い目になにも映さないままぼんやりと見つめ、佇んでいた。

死にたいと、思っていた。呪いの子なんかになっってしまうのなら、生まれてこなければ良かった。泣きたいのに、涙は出てこなかった

し、叫び声を上げて喚きちらしたかったのに、喉がカラカラで声も出ない、身体も思うように動かない。

だからそのとき、勢いよく扉が開いて村の男たちが入ってきてても何かを叫んでアデルを縄でしばりあげていても抵抗しなかった。

最後に見たのは、父さんの怒り狂った顔と母さんの泣き顔。

そして、見つめられるとぞくりとして、冷や汗が出るほど、きつく冷たい、灰色の氷の瞳。

「……デル……」

「アデル……」

アデルはこの低い、よく響く声で気がつき、さっと顔を上げた。自分が、高い脚の椅子に座っていることが解った。声の主の顔は、アデルの三十センチほど上で、アデルを見下ろしている。

男は、一度もアデルから視線を外さず、真正面から、ひたとアデルを見据えていた。アデルは、その威厳ある翡翠のような瞳を見つめ返しながら、いつの間にか、きつく身体に食い込んでいた縄が取れていることに気づいた。

「あ……あの……おじさん、誰ですか？」

思ったことが、素直に口から次いでた。本当に、この翡翠のような切れ長の瞳も、低く印象に残る声も、何もかも見覚えがない。

「こらっ！ この御方におじさんとは何だ！ 《汚れし者》め！」

突然真横から声がして、アデルはびくりと身を震わせ、横に何人もの立派な赤い服を着た男が勢ぞろいしているのに気がついた。アデルはそれが、よく物語に登場する、お城を守る衛兵だとすぐに解った。ということは、此処はお城なのか？ この国にあるお城といえ

ば、あそこしか　！

……まさか。

アデルは不吉な事実を無理矢理頭の隅に追いやった。ただでさえ混乱しているのに、混乱の種をわざわざ一つ、増やしたくない。

それより、衛兵の一人が言った、《汚れし者》の意味がよく解らない。

アデルは口を半開きにして、目の前の衛兵をじっと見た。その様子に腹が立ったのか、さっきの男とは違う者がアデルに掴みかかるようにする。

途端、翡翠の目の男が素早く反応した。厳しい目でひと睨みし、首を横に振って衛兵を制した。衛兵はそれを見て少し驚いたようだが、更に険しくなる男の目にたじろぎ、素直にアデルから離れると男に向き直り、詫びるように恭しく頭を下げた。そして素早く頭をあげ、さっき居た場所に戻り、気をつけの姿勢をとった。そのまま、ピクリとも動かない。

少しほっとしたアデルは、男に感謝の気持ちも含めてちらりと目配せし、それからゆっくりと部屋の中をみまわしてみた。

部屋はとても広く、天井には大きなシャンデリアが幾つも輝いている。床は、淡く光りを放つ程に磨き上げられた、真っ白な大理石で出来ている。そのど真ん中に、青い絨毯が真っ直ぐに伸びていた。アデルはその行く先を目でゆっくりと追い、視線を上にした。低めの段差が、三つほどある上に、真っ青な装飾物たちに彩られた金縁の王座がどっしりと重く構えていた。

アデルはどきりとして、悪い予感を追い払うように王座から慌てて目をそらした。

真っ赤に染め上げられた壁には幾つもの　恐らく王族の者だろう。今より一つ古い肖像画の男に見覚えがある。アデルのいる村に訪問したことがあるのだ　肖像画が掲げられている。その中で特に真新しく、生き生きとした筆使いで描かれた、素晴らしい絵に視線が止まる。目の前の男と比べてみると、どうやらその肖像画のモ

デルはこの男らしい。

途端にアデルの頭のなかは真っ白になった。アデルは、さっきの自分の予感が見事に的中したことを確信したのだ。目の前の男の頭には、金色に輝く王冠が乗っていた。

アデルはその王冠を目にし、ここで初めて驚きを感じ、目を見開いた。

僕の目の前にいるのは、この国の王だ

！

「今宵、悪魔からの邪悪な贈り物を手にし、伝説の子 イースタンビレッジ、ノードリー家長男」

「アデル・ノードリー」

アデルが部屋を一通り見渡すのを待ってから、国王は改まって、アデルの名を繰り返す。

「は、はい……」

アデルはぴつと背筋を伸ばしていった。国王はにつこりと品のいい微笑みを浮かべ、アデルと国王以外の者を全て部屋の外へ出させた。アデルは不安そうな顔をして衛兵達がぞろぞろと部屋の外へ出て行くのを見送った。大人がわざわざ人払いをして話するのは、大抵良い話ではないのだ。

「さて、あまり時間がないのでな 唐突だが早速、本題に入ろう」
アデルは黙って、国王が続けるのを待った。

「本当だったら、お前は死刑になるはずだが」

アデルはそれを聞いて、首筋に悪寒が走った。ゴクリと、唾を飲み下す。

「まあそう硬くなるな 大丈夫。お前は死刑にはならぬ。お前は
まだ、幼すぎるのだ。そこで私は考えた。アデル、お前が八年後
十六歳になったとき……」

そのとき国王はアデルの不思議そうな顔に気がつき、困ったような
笑顔ををちらりと見せて説明をした。

「ああ、その…… 魔法界……（国王はこの魔法界の
言葉をいうとき、こんな汚らわしい言葉言いたくないとも言っよ

うに、顔をしかめてみせた」というところでは真に非常識ながら十七歳が成人らしくて　書物を読んだんだ　その頃にはもう殆どの魔法も使えなくてはならないようなのだ。だからその・・・準備もかねて、とても大切な・・・強大な力をもつ、あるモノをお前に探してきて欲しい」

国王はここで言葉を切って、アデルの澄んだ青い瞳を真っ直ぐに見つめた。アデルは戸惑いをこめて国王の翡翠のような瞳を見つめ返した。が、なぜか国王の目を見た瞬間、わけが分からなかったことが無理矢理にも受け止められているような気がした。

「その探し物はお前の力を借りないと手に入られない、特別なものののだ」

国王は茶目つ気たつぷりにアデルに笑いかけると、小指を差し出した。今度はアデルにもその意味がすぐにわかった。誓いの儀式だ。

アデルはおずおずと自分のか細い小指を差し出し、国王の指に近づけた。国王はアデルの指と自分の指をしっかりと絡めると、終始、微笑を浮かべながらゆっくりと言った。

「私、トウーマリア王国現国王アーノルド・ヴィリアンは、この呪われた少年が十四歳の誕生日を迎えるまで、この国にとどまり普通の暮らしを送ることを認め、生活を保護することを誓います」

アデルは、呪われた少年、という節に少し戸惑ったが、大きく息を吸い込むと国王を見上げた。

「お前の番だよ」

国王は促した。アデルは乾いた唇をなめると咳払いをした。

「私、トウーマリア王国イースタンビレッジ、ノードリー家長男アデルは、十四歳の誕生日を迎えるその日まで、国王に変わらぬ忠誠と国民の義務を果たすことを、そして呪われた子として十六歳になったら国を出て国王のお役に立つことを、誓います」

国王は大きくうなずくと、絡めていた指をそつと離れた。

「さあ、もうお行きアデル。お父さんとお母さんのもとに帰るんだ」
国王が甘く、やさしく、囁く。

アデルは詰めていた息を吐き出すと、国王に向かって深々とお辞儀をした。

父さんと母さんの元に帰れる！それだけでアデルの胸はいっぱいで、そのとき国王が浮かべたずる賢そうな微笑と、僅かにめくれあがったマントから覗く足に、自分と同じ、魔術師の焼印があるのに、気づきはしなかった。

帰りは立派な馬車で衛兵が送ってくれることになった。アデルは馬車が揺れるたびに、お尻を硬い座席にぶつけて何度も顔をしかめた。しかし隣に座っている、体格がよく、目つきの悪い衛兵に文句を言うほどの勇氣はなかった。しばらく馬車に揺られていると、ふと衛兵が話しかけた。

「お前は運がいいな。今の国王のときに魔術師になって」
アデルはむっとして小さな声で言い返した。

「別になりたくて魔術師になんか、なったんじゃありません」

「あ　まあ、そう怒るなよ。そりゃわかってるぜ。おれだって、魔術師なんかになるのはごめんさ。ただ、現国王は歴代の国王の中でも一番寛大で心優しいお方だと隣国にも噂されるほどだ。あと一足早かったら今頃お前さんのその首は、胴からとつくに離れちまってるだろうよ」

アデルはまた首筋がぞくりと冷たくなり冷や汗が出た。何か言い返したかったが、今声を出したら震えていて、衛兵に弱虫だと思われるので、しかめっ面をして黙っていた。

「それより、．．．なあお前、国王陛下から何を探しに行くのかきいたか？」

今度の衛兵の声は真剣だった。

アデルはつとした。

「聞いてません。母さんたちに会えるって、そればかり考えてたから．．．あの、あなたは聞いたんですか？」

衛兵は微かに眉をしかめてから小さな声で答えた。

「……いや。聞いてない」

衛兵はそれ以上話しかけてはこなかった。

あまりずっと馬車がつかないので、アデルはうとうとし始めた。

国王のところへ行くときにはこんなに長くかからなかったのに・

・

アデルはあまり働かない頭でやっとこれだけ思った。

家に着いたころには、もうアデルはぐっすり眠っていた。

気がついたのは、翌日の昼。奥の部屋で、クラリスとフレッドが何か言い合っているようだ。

アデルはゆっくりと起き上がった。ここがリビングのソファだと、少ししてから気づいた。クラリスが気を遣って、すぐに寝かせてくれたのだらう。ゆっくりと立ち上がってみて、危うく床に頭を打ち付けそうになった。世界がぐるりとまわる。一瞬だが、激しい吐き気がこみ上げた。アデルは何とかソファにしがみ付き、再び立ち上がると、おぼつかない足取りでクラリスのもとへ歩き出した。

アデルが近づくと、クラリスが何か叫んで、アデルを抱きしめた。フレッドはアデルを見て、ほっとしたように小さく笑いかけてくれた、その笑顔には、父親の、子供が無事なことを心から喜ぶ純粋な気持ちしかなかった。アデルは心底ほっとして、また倒れそうになった。クラリスが支えてくれなかったら、床に頭を強打して、死んでいたかもしれない。

「アデル、大丈夫？ 気分が悪いの？ 元気がないようね……まあ、それもそうだけど」

「大丈夫だよ。……母さん、僕、十六歳になったら、この国を出て行かなきゃならないんだって」

アデルを抱きしめるクラリスの腕に僅かに力がこもった。

「……ええ、知ってる。昨日の夜教えてもらったの。……」

でもそれまではずっと家にいていいのよ」

クラリスはアデルを離して、瞳を真っ直ぐ見つめた。

「お腹、すいたでしょう。ちょっと遅いけど、朝ご飯にしましょう」
クラリスは素早く台所の方へいった。そのとき、階段の上でアルがじつと見ていたのに気がついた。アルは兄が自分に気がついたとわかると、階段をだつと降りてきた。

「兄ちゃん、魔術見せてよ」

気持ち悪いくらいの、可愛い笑顔だ。アデルは思わず目を逸らした。
「なんだよ、アル。お前昨日まで、僕のことすごく嫌ってたじゃないか」

アルは困ったように頭をかきながら、上目遣いに言った。

「ごめん。僕も昨日は兄ちゃんが魔術師だと知って、興奮しちゃっただけだよ、本当に。だからさ、早く魔術を見せてよ」

「……そう言われたって。僕まだ一度も魔術なんか使ったことないし……。わかんない……。わからないよ」

アルはそれでも食い下がる。

「まあ、いいからいいから。とりあえず何か浮かばしてみてよ。悪魔から力をもらったときから、魔法が使えるんでしょ？……僕聞いたんだ。友達のヴィルから。兄ちゃんも知ってるだろ？いいなあ。魔術師って、なんでも出来るんだよね？空を自由に飛べたりしてさ。ほんと、羨ましいや」

アデルはその言葉を聴いて、さつと血の気が引くのがわかった。弟があまりにもむごいことを、無邪気に、ただ純粋な好奇心で言ってきたことにも、腹が立つ。

羨ましいだって？好きで魔術師になるわけがない

アデルは必死に自分のなかの凶暴な影をおさえ、出来るだけいつも調子で言った。

「っ　だから……。本当に、どうやるかわからないんだよ」

「ふーん……。じゃあ、何か呪文を言ってみなよ。どうにかなるかもよ。……。ねえ」

「………わかんない」

アルは少し考えてから疑わしそうに兄を見た。

「本当に？ 本当にどうやるかわかんないの？ 本当に？」

アデルは大きくうなずいた。

「本当に本当？ ねえほんと？ ほんとわかるんでしょう？」

あんまりアルが「本当？」を連発するのでアデルはついに真っ赤になつて喚きだした。

「本当にわかんないって言ってるだろう？ 何回言ったら分かるんだこの……石頭！」

途端にアルはびっくりしたように目を見開いて、回れ右をした。そしてまるで誰かに操られているように、すたすたと行進しながら階段を上っていった。

「え？」

今度はアデルがびっくりする番だった。アルはいつもこんな素直じゃないはずだ。

今思えば、これが僕が一番最初に使った、「魔法」だった。

第2話

それからの八年は、とても短かった。いや、本当は長い年月がたっていたのだが、アデルにはとても短く感じられたのだ。それこそまるで、「魔法」のように。

アデルはアルに使った魔法以外、この八年間、魔術は一度も使ったことがない。しかもその魔法は自分では自覚のないものだった。ただでさえ、アデルが近くに居ると皆逃げ回るのに、魔術なんか使ったら袋だたきだ。十六歳になる前に、死んでしまう。

十六歳になったアデルは、再びあの遠い王宮へ向かったのだった。

「母さん、じゃあ行ってきます」

アデルは心なしか弱々しい声で言うと、母親の小さな身体を、ギュッと抱きしめた。それから戸口へ向かいもう一度振り返ると、クラリスは励ますように、優しく微笑みかけてくれた。アデルはそれでほんの少し元気を取り戻し、自分も微かに微笑むと、また不安に押しつぶされ、無様に母のもとへ戻ることになる前に急いで外へ出た。そして深く溜め息をついてから、陰鬱な表情のまま、重い足を前に進め始めた。

十六歳になったといっても、アデルはそれほど変わらなかった。身長も、百六十センチちよつとしかないし、体格もまだひよろりとしている。顔つきは、よく大人っぽくなった言われるけれど、くりくりの大きな青い瞳や、肌が白いせいですぐに紅く染まる頬のおかげで、まだまだ子供っぽい。それに比べて、アルテミスはものすごく成長した。まだ十二歳なのに、兄よりも数センチほど背が高いし、声も早々と声変わりして、大人っぽくなってきた。体格なんか、八年前、アデルが見たあの衛兵と互角なほどだ。しかし残念なことに、

アルのあの小生意気で意地っ張りな性格は、まったく変わらなかった。

アデルは重い足を引きずるようにして歩きながら、この八年間、考えに考え、それでもまだ答えの出せないあの“問題”のことを思った。

その“問題”とは、八年前、あの王宮で国王に言われた「探し物のことだ。

国王のわざとらしいほどの茶目っ気たっぷりの笑顔。八歳のころ、アルに魔術をせがまれたときの笑顔にそっくりだった。何か怪しい……。アデルは最近から胸の奥で、もやもやと胸やけがする。これは、八年間の中でもあった。この感じがすると、必ず近いうちに不運がやってくるのだ。

アデルはぼんやりと物思いにふけりながら「待ち合わせ場所」まで行った。待ち合わせ場所は、このイースタンビレッジで一番大きく、村の中心にあるイースト広場だ。

アデルの住んでいるところは村外れで、静かなところだった。イースト広場は村の中心部にあるので村外れから行くと、少なくとも三十分はかかる。しばらく待つと、道の奥のほうから、馬の軽快な足音が聞こえてきた。すぐに、立派な白い馬に引かれた、大きな馬車が見えてきた、なんとなく、懐かしい感じがする。

このときアデルは、いつも賑やかなはずのイースト広場が、なぜかガランとしていて人気がないことに、気づかなかった。今思えば、最初にこのことに気づいておけばよかったのだ。これがあの人が仕掛けた、最初のトラップだったのだから。

それからアデルは、まだ物思いにふけりながら上の空で馬車に乗り込んだ。考えが、不思議なほど頭のなかでグルグル回っていた。次々に新しい考えが浮かび、他の事に気をつける暇が全くない。

衛兵や御者の様子がおかしかったことにも、アデルは気づかなかった。衛兵はしっかりはしているが何かしょんぼりとしていて、馬車が揺れると、まるで人形のようにされるがままになっているのだ。

御者も衛兵とまったく同じだった。ただ馬を操っているだけで、一言もしゃべらない。しかも馬の足音さえしないのだ。白馬は空を走っているように、ぬれている地面に触れていない。アデルがこのことに気づいたのは、もう何時間もたったあとだった。

はっとして顔を上げると、辺りはシーンとして、自分の呼吸の音しか聞こえない。アデルは一瞬、僕の耳はおかしくなったのかと思った。鳥が鳴く声もしない。王宮のある村プロテマは、国中の村の中で一番賑やかで、一番美しい村と評判なだけあってこちら辺にあれば、思わず耳を塞ぐくらい騒がしいのに。アデルは急いで、馬車の外をみてみた。

誰も居ない。

道を歩く娘達の喋り声も、学校へ向かう子供達のはしゃぐ声も、家の前を箒で掃くリズムのいい音も、家にもぐりこんでいたねずみを追い払う、数人のおばさんが喚く声も、道端で、果物や布生地を売る威勢のいいおじさんの声もしない。道の両側にたつ木々のざわめく優しい音も、小鳥が紡ぎだす、美しいメロディも！

言葉通り、人っ子一人、いないのだ。静か過ぎる。アデルはブルッと身震いをした。

王宮はもう、目の前だった。

不意にアデルの頭のなかで、八年前の王宮での記憶が蘇った。国王の茶目っ気たっぷりな笑顔、温かく大きな手。よく響く印象的な声に最後にちらっと見た少し意地悪そうな微笑まで。そして、アデルの頭の中で「気をつける・・・警告だ」の文字がガンガン響いた。アデルはこの文字の意味と記憶に蘇ったあの光景で、これも魔術師の能力なのか、直感的にわかった。

僕がこれから行くところは、危険だ。

アデルはごくりと生唾を飲んだ。大きく、飲み込まれそうな王宮は容赦なく、じわじわとアデルに近づいてきた。

「カタン・・・」

静かに馬車が止まった。衛兵は無表情のまま扉を開け、恭しくお

辞儀をした。アデルは用心しながら馬車を降り、無表情の衛兵たちの案内に従った。

八年前来たときは、まだ皆いろいろな表情をしていて、いろいろな動きをしていたが、今は無表情。腕だけを動かし、道を示している。

何時間も経ったように思える。同じ所をグルグル通った気がする。そろそろ、気が変になってしまふんじゃないか？ アデルの目が回ってくるころになって、やっと国王の部屋の前についた。そこで衛兵はお辞儀をして、さっさと去っていった。アデルはしばらく呆気に取られて去っていく衛兵の背中を見ていたが、ゆっくりと扉のほうに目を向けた。

なるほどね。一番嫌な仕事は、僕に任せるって訳だ。

この扉を開けるのがどれほど大きな仕事か、あの衛兵は知ってか知らずか、アデル一人を残して去っていった。今、押しつぶされそうな程大きな不安を胸に秘めたアデルが、不安の種である張本人のいる扉を、威勢よく開け放し、入っていけるだろうか？

アデルは深く溜め息をついて、案内をした衛兵を小さく恨みながら、扉の取つてを掴んだ。ありったけの勇気を出して、勢いよく捻る。

八年前の部屋と、少し変わっていた。大きなシャンデリアは見覚えがあったし、国王自身もそれほど変わったところはない。しかし、大きく変わったところが、所々見受けられた。まず、壁紙の色が、真っ赤ではなく濃い灰色になっていた。趣味が変わったんだろうか？それに、たくさん掛かっていた歴代国王の肖像画も今は姿を消し、代わりに趣味の悪い、白黒の薄汚い絵が、散り散りに掛けてあった。そして、一番大きく変わったところは、肘掛のついた椅子に深々と腰掛けた、国王の右隣に立つ、美しい女性だった。

女性の、長く美しい、艶やかな金髪の上には、銀色に光るティアラが乗り、肌は驚くほど白い。あまりに白すぎて、灰色の部屋の中

でやけに輪郭がはつきりと見える。ほっそりとした首もとには、銀色に輝く宝石がはめ込まれた、ゴージャスなネックレスをしていた。ドレスはすべて真っ白。シンプルだが、よく見ると高級そうで、胸のところには大きな銀色のリボンがついていた。そして、形の良い顔の、その大きな緑色の瞳は、アデルを真っ直ぐと、冷ややかに見つめている。

「やあ、久しぶりだ。さすが、成長したな。アデル・ノードリー」
国王の、今も変わらない、あの印象的な響く声で、女性に見惚れていたアデルは、ハッと我に返った。

「約束の時期が来た。よく来たな、まあ座りたまえ。よく話合おう」

国王は目の前の椅子を指した。アデルが動くと、女性の目もそれを追って一緒に動く。

アデルはその視線を気にしてちらちらと女性のほうを盗み見た。

国王はそれに気づくと女性のほうを向いていった。

「やめなさいティーナ。アデルが気にしているだろう」

ティーナと呼ばれた女性は、ちらりと国王を見て、それからアデルに無理矢理ぎこちない微笑を送ると、もう一度国王を見て今度は愛想よく微笑みながら謝った。

「ごめんなさい、お父様」

とても静かで、鈴でもなるような美しい声だったが、すこしきつい感じもあった。アデルはそのとき、ティーナと呼ばれた女性の目の色が、国王と瓜二つなのに気づいた。国王は軽くうなずくと、女性のほうを指してアデルに視線を向けた。

「紹介しておこう。こちら私の娘、ティーナ・エリン・ヴィリアンだ。妹もいるのだが、奥の部屋にこもっていてな……。次の世代の女王だ」

ティーナはアデルに向かって形だけのお辞儀をして、顔をあげるとまたアデルのことをじろじろと眺め始めた。アデルはまさか、王族にお辞儀をされるとは思わなかったので、戸惑いながらもお辞儀を

返した。

国王は次にアデルの方を指してティーナ王女に言った。

「そしてこちらが、呪われし子ども、アデル・ノードリーだ。約束のときまで、イースタンビレッジに住んでいた」

アデルはぎこちなくお辞儀をしながら、そのとき、国王がちらりとティーナ王女の方を見て意味ありげな視線を向けているのを、見逃しはしなかった。

アデルの不安な気持ちは限界を超え、自分でも思いもよらないことに、ずっと心にしまっていたことを、叫ぶように訴えかけていた。
「あ、あの・・・国王陛下、僕はこれからいつたい何処へ・・・何処へ何を探しに行かなければならないのでしょうか。僕を生かしてまで手に入れたかった物とは、一体なんなのでしょうか　　ずっとそれが気がかりで・・・教えてください！」

二人は驚いて呆氣にとられ、しばらく顔を見合わせて沈黙していた。気まずい沈黙のあと、ティーナが怒りでギラギラと目を光らせながらずんずんと前に出てきた。アデルはそれを見て、しまったと思ったが、もう遅い。ティーナは、国王が止めに入る隙もなく真っ白い顔を真っ赤に染め、早口で喚き散らしはじめていた。

「アデル・ノードリー！　あなた、今誰と話していると思ってるの？　目の前のお方はトゥーマリア国王と、その娘ティーナよ。なんて口の聞き方なの・・・！　自分がどんな物言いをしてるか、解って口を開いてるのかしら。いったいどんな暮らしをしてきたの？　きっと礼儀というものを両親から教えてもらってないんでしょね・・・まあそれもそうだが、イースタンビレッジですって？　この国で一番薄汚い所じゃない！　・・・それにしても失礼な言い方だわ。あなた、自分がどんな身分かもわかってないのね。私たちと同じ部族だって聞いたから少しはできるものだと思っていたけど・・・。ちっとも礼儀がなっていないじゃない！　こんな人にあんな大事なものを　　」

「ティーナ！　言いすぎだぞ！」

アデルはびくりと身を震わし、反射的に国王の方を見た。国王はものすごい剣幕でティーナを睨みつけている。ティーナはハッと口を押さえ、いまだアデルを睨みつけながら静かに言った。

「ご……ごめんなさい。言い過ぎましたわ。お父様、私部屋に戻ります」

ティーナは国王の返事も待たずにカツカツと靴音をたてながら急いで部屋を出て行った。アデルはなんだかほつとしたような、悪いことをして気まずいようなおかしい気分になった。ティーナがいると、周りの空気が張り詰められているような感じがするので、居心地が悪かったのだ。それにしてもさっきの国王の剣幕には驚いた。優しい印象のあった国王があんな大声を出すなんて……。アデルは改めて国王を見た。

国王はやれやれと首を振ると以前見たことのある、あの茶目つ気たつぷりな笑顔をアデルに目いっぱい見せてから、口を開いた。

「ティーナのことは気にしないでいいぞ。いつもカリカリしていてな。すぐに忘れてくれ。ところでお前がさっき言った探し物ことだが……これは非常に危険なことなんだ。並の人間じゃあ、出来ない。だから、お前が大きくなるまで待った」

アデルは国王の顔を見つめながら、やっぱりだと思った。

「お前はまだ小さかったから、わからないだろうが、この国の大きな五つの村　お前が住んでいるイースタンビレッジも入る。ノーザンビレッジ、サザンビレッジ、ウェスタンビレッジ、そしてこの王宮がある一番大きな村、プロテマビレッジ。この五つの村には一つずつ宝石がある。いずれもこの国の宝だ。ところが何百年か前にその宝石を悪の鳥　巨大なカラスのような怪物が飛んできて、その宝石をどこか遠いところへ投げ捨ててしまった。別々のところへな。巨大な鳥がなぜこの地に来たのか、どうして宝石を盗んだのか、理由は解らないが、その伝説が描かれた古い書物には、とても興味深いものが描かれていた。地図だ。宝石の捨てられた位置を推測して作られた。あくまで推測だが、そこにある可能性が高い

ことが最近になって明らかになった。その五つの宝石のうち少なくとも、三つの居場所はこの地図でわかる。が、いずれもとてつもなく危険な場所だ。しかも後の二つはまだ行方がわからんときている。そこで、魔術師のお前が、死刑のかわりに行くことになる。伝説によると、その五つの宝石がすべてそろくと、強大な力を発揮するといわれているのだ。 いずれにせよ国の宝だ。一刻も早く見つけ出し、元の場所に戻さなければ――

国王はここで言葉を切り、呆然としているアデルにあの笑顔を向けた。

「驚くのも解るが……大丈夫、お前は悪魔から力を得ている。その力があれば、宝石は取り戻すことができるだろう。並の人間なら、できない事だってできる。魔法の使い方は、道中で嫌でも自然と覚えられるだろう。魔力が無くては通れない道が、幾つもあるかな。しかし、これは本当に危険な旅になるはずだ」

国王は、感情の読めない翡翠の瞳で、アデルをひたと見据えた。アデルの瞳が、その視線を受け止めるのを見て、ゆっくりと続ける。

「死を………覚悟でなければできない。 良いな？」

アデルは黙って国王の話を聞いていたが、次第に身体がぶるぶると震えだし、止まらなくなってしまった。

こんな旅、無理だ。いくら僕が魔術師だって、魔法なんか一度もやったことがないのに……。国の宝だなんてそんな大変なもの、探し当てることなんてできない。ましてや死を覚悟の上なんて……。こんな急に言われたって。

アデルは必死で震えを抑えながら国王を真っ直ぐに見つめ、声を絞り出すようにしてやっとの思いで口を開いた。

「国王陛下。大変失礼ですが、その旅は到底僕の手には負えません。まだ一度も魔法を使ったことがないのです……。それに――」

「ほう、ではお前は死刑で良いのだな？ この旅に行かないとする」と、お前を生かしてはおけん。国の恥だ。……。私は約束を守った。お前が十六歳になるまでこの国にとどまらせ、普通の生活を

保障した。そうだろう、違うか？ 今度はお前が、約束を果たすときだ。それにお前がこの旅を拒絶するなら 当然家族もお前と同一罪とみなし、死刑を執行することになる」

国王はアデルの言葉を遮って、今まで一度もアデルに見せなかった、氷のように冷たい目を向けながら吐き捨てるように言い放った。

アデルは少しの間、国王の言った意味が理解できなかった。

そして、次第に身体の奥底から湧き出る怒りに肩を震わせ、国王を睨むように見つめた。憤慨で頭がおかしくなってしまうそうだ。国王は、依然冷淡な顔つきのまま、アデルの返答を待っている。その表情には、アデルの反応を楽しむかのような余裕が漲っている。アデルはそれにも腹が立ち、もう少しで国王に飛び掛りそうになった。

酷い 結局は、無理矢理でも僕を旅に行かせるつもりだったんだ。今までの態度は、僕を騙すため？ あの優しい笑顔も温かい手も全てまがい物だったのか？ それに僕が行かなかつたら、

母さんや父さん・・・アルが

アデルは顔を上げ、真正面から睨むように国王を見た。国王はうつたえる様子も見せず、感情の無い冷たい陰が覆うその視線をアデルに注いだ。その視線からは、何の思いも読み取れない。表情も青白く、なんの感情も表さなかった。

少年は、覚悟を決めた。

「・・・・・・分かりました。行きましょう、宝探しの旅へ」

第3話

王宮から帰るときも、いつもの賑やかさはなく、まったく人気がなかった。アデルは少し気にしたもの、これから行く危険な宝探しのことで頭がいっぱいで、すぐに気にしなくなった。それに、行くときよりもあまり時間はかからなかったように思える。

五つの宝石の地図は、国王から直々に手渡せられた。最初に行く場所はなんと「怪物の洞窟」だった。アデルは最初にこの文字が目に入ると、驚愕で地図を落としそうになった。

「怪物の洞窟」とは、イースタンビレッジに隣接するノーザンビレッジとの境にある、怪物の存在がほぼ間違いないと確認されたと村人から恐れられているところだ。

昔、ノーザンビレッジに住む血の多い男たちが、あんまり村人が怪物、怪物と騒ぐので、本当に怪物がいるのかと調査をしに洞窟へ行ってみた。しかし、いくらたっても帰ってこないの、村人たちが搜索隊を出すと、その洞窟の前で男たち全員の遺体が発見された。巨大な爪のような、鋭い刃物でズタズタにされた無残な姿で、また、本当に怪物を目撃したという者も数人現れ、怪物は実在するものだと分かった。それからは村人たちは、その洞窟を「怪物の洞窟」と呼ぶようになり、誰も近づかなくなった。

そこに在るとされている宝石は「ルビー」

アデルは生まれてこの方、「ルビー」なんて高価な宝石、みたこともなかった。アデルはこの地図と説明を読むと、改めて自分にとっても恐ろしく、危険な旅へ行くことを実感した。それにこれは、アデルの家族と王族だけが知っている、極秘の旅なので自分が魔術師のアデル・ノードリーだということと、旅の目的を国民に絶対に洩らしてはならないと、忠告された。

アデルは家に帰り、準備ができ次第旅立つことを両親に伝えると、荷物をまとめて部屋にこもった。しかし 正直言つて、アデルは荷物といつても、何を持って行けばいいのかさっぱり分からなかった。旅行でさえまともに行ったことが無い。とりあえず、地図と、寝袋、水、毛布……

下の階では、クラリスが泣きじゃくつて、フレッドがそれを必死で慰めている。クラリスのキンキン声が、響いてきた。

「酷い！ こんなので……あんまりじゃない！ 帰ってきてすぐに旅に出るなんて。ましてやそこが怪物の洞窟なんて。酷すぎる！ 私、国王に文句を言ってくるわ！ うちのアデルがあんな危険なところへ行くなんて許せない！」

クラリスがドスドスと玄関の方へ行く音がした。フレッドが慌ててクラリスを落着かせようとめちやくちなことを言い始める。

「お 落着けクラリス。大丈夫だ。アデルはもう大きくなった。前みたいな、幼い子供じゃない。……陛下にだって、何か……お考えがあるのかもしれないし。それに文句を言つたって、聞いてくれるはずないじゃないか。相手はこの国の王だ。僕らが太刀打ちできる相手じゃないんだ。……解ってくれ、クラリス」

「じゃああなたは、アデルがあんな恐ろしいところへ行つて無事に帰ってくるのを、指をくわえて此処で待つていうの？ とてもじゃないけど、私には無理よ！ わが子がいつ怪物にやられて死んでしまうのか解らないのに……信じられないわ……あの子、魔法なんか一度だつて使つてないのよ？ 本当に魔術師なのか、疑うのが普通よ……」

クラリスは力が抜けたように床にへたり込んだようだ。もう暴れる音はしてこない。フレッドが安堵の溜め息を吐いて、アルを呼んだ。その顔が、悔しそうに歪んでいるのを、なんとなく想像できた。

突然のお呼びで、隣の部屋からドタドタと不器用に部屋を出るアルの足音がする。フレッドは、アルの信じられないくらいの馬鹿力を借りて、母さんを抱き上げ、ベットに運び込むのを手伝わせるみたいだ。

アデルはそのやり取りを、おかしい気分ではんやりと聞いていた。自分がクラリスやフレッドの態度を、嬉しく思ふべきか重荷に思ふべきか、解らない。

アルはというと、八年前、アデルが魔術を使うのを断つて以来、更にアデルに嫌悪を抱くようになり、ロクに口も聞かなかった。最初こそ寂しく思ったものの、もともとアデルもアルに好意を持っていたわけでもなく、あまり気にしなくなった。

しばらくしてから、アデルはこれでいいのかと、自分の荷物に不安を覚えながらも仕度を済ませた。その後、フレッド達が二階へ行っている隙に、こつそりと台所にいき、食糧を調達した。ここに残る家族のことと考え、あまり多くは持つていけなかったが、足りなくなったら近くの村で調達すればいいと思った。旅に必要な費用は、国から余るほどもらっている。

全ての仕度を終わらせて、部屋に戻ると、なにもすることがなくなってしまった。時計を見ると、まだ寝る時間にしては早い。太陽も、沈みきってしまうのを惜しむかのように、西の低い空にぼんやりと浮かんでいた。アデルはしばらく部屋の中を当てもなく歩き回った。

そして、ある決心をすると、引き出しから細長い小さな便箋を取り出し、ペンをインクに浸した。一瞬躊躇したが、意を決して、何かを書き始める。文章は、出来るだけ短いものにした。あんまりだらだら書いていたら、夜が明けてしまっただろう。アデルは殆ど走り書きに近い、らしくない乱雑な字でさっさと書き終えると、丁寧に小さく折りたたんだ。

リビングにいくと、案の定、誰もいない。灯りが消えていたことからして、みんなもう自分の部屋に引き上げたようだ。アデルは、

テーブルの上に折りたたまれた便箋を置いた。

途端、様々な感情が、渦を巻いて身体の奥底からこみ上げてきて、いてもたってもいられなくなった。

哀愁、後悔、怒り、不安、緊張、恐怖、戸惑い、愛しさ、寂しさ、義務　もろもろの感情が、渦を巻いて激しさを増す。身体がバラバラに引き裂かれるような痛みが、何度も全身を走り抜ける。

今ここで、何もかも破り捨てて大声で泣き叫びたい衝動が、体中を駆け巡る。

アデルは、静かに佇んだまま、制御できなくなった激しい感情の渦と必死に闘った。いつの間にか握り締めてい拳に、力がこもる。息が荒い。落ち着こうとして、深呼吸を試してみたが、上手く肺に空気がいかない。頭がおかしくなってしまうようだ。

しばらくして、何とか泣き叫びたい衝動からは脱した。アデルはもう一度、落ち着こうと深呼吸を繰り返す

不意に、涙が一つ、青白い頬を伝って、テーブルに落ちた。自分でも驚いて、涙の通った後を指でなぞる。確かに、湿っていた。

しかしそれに続いて落ちてくる滴は、ない。それだけだった。たった一粒。

誰にも気づかれず、アデルはこの家、この家族、この村　これまでの全ての思い出と、別れを告げた。

これで、もう二度と後戻りはしないでいい。

アデルは、濡れた頬を拭くと、前を見て、息を吸った。気分が少し、すっきりする。

アデルは便箋を置いたほうを一度も見ずに、自分の部屋へ戻った。明日には、出発することにした。

時刻は、五時三十分・・・いつもと同じ朝だ。

アデルは、この平凡な朝に、これからとても危険な場所へ宝探しに行くなんて、まだ信じられなかった。

「魔術師・・・」

アデルは、一音一音はつきり発音しながら、小さく呟いてみた。やっぱり、「魔術師」という言葉はしっくりこない。大きくため息をつくと、またドサリとベットに倒れこんだ。

ふと、何かの気配を感じ、起き上がって辺りを見回してみた。誰もいない。

「?・・・」

確かに気配が感じられたのに。

アデルが魔術師になったあの日から、アデルの五感は、人並み以上に鋭くなった。気配を感じて、後ろに誰もいなかったことなど、初めてだ。

「おい・・・魔術師アデル」

突然真上から、揶揄を含んだような、それでいて少しイラついてるようなガラガラ声が響いた。アデルは驚いて天井を見あげた。何か、シュツと、すごい速さで動く。

「!?・・・」

今まで聞いたことのない声だった。

「だ・・・誰? 誰がいるのか?」

アデルは、今の声がどうか空耳でありますようにと願いながら、小さく問いかけてみた。

何も起きない。

やはり空耳かと思い始めたとき、今度は背後から間近に声が聞こえた。

「おい!・・・俺様に向かって誰だとは何だ! 新米魔術師の

くせに」

アデルは全身に鳥肌がたった。

な、なんだ？ また魔術師になった証の焼き印みたいなものか。

アデルは覚悟を決めてゆっくりと首を回し、声がしたところ見てみた。

こう・・・もり・・・？

とても小さなこうもりが、アデルを見上げている。グリグリとした金色の瞳が気味悪くギラリと光った。

まさか・・・こうもりが喋るわけな

「こうもりが喋らないなんて誰が決めたんだ！ あ？ 言ってみろ！・・・たたく、世間知らずのガキンちょが！ 俺様はこうやって話してるじゃないか！」

アデルの心の中を見透かしたように、こうもり（？）はすぐさま怒り狂って否定した。

「確かに・・・こうもりが・・・喋ってる！？」

アデルは心底驚いて思いきり後ずさった。こうもりのようなものは早口で言ったが、アデルはこうもりの大きく裂けた口が、それに合わせて素早く動くのを、はつきりと見たのだ。

こうもりは、アデルの反応に満足そうな意地汚い笑み浮かべ、少しくすんだ金色の瞳で、アデルの顔を覗き込んだ。

「おいお前、驚くタイミングがおかしいぞ。やっぱりまだまだ新米魔術師だな。ふん！ 俺様がそういうこともまとめて教え込まなきゃならんようだ。こりや大変だ・・・」

大変などいいながら、こうもりはなんだか楽しそうだ。

ちよつと待てよ、こうもりが言った「教え込む」って、いったいどういうことだ？

こうもりはバサッと宙を舞い、アデルの目の前のベットに着地した。「お前、名前はなんだ？ ジョンか？ ボブか？ ほらさつさと答えろよ」

アデルは突然の問いかけに戸惑い、一瞬自分の名前を忘れかけた。

が、すぐに思い出し、金色の不気味な瞳を見ないように、出来るだけ平静を装って言った。

「ア アデル・ノードリ。君は……名前なんてあるの？」

「なんと無礼な！ この俺様に立派な名前がないとでも思ったか？」
こうもりが怒り狂って大声を出した。アデルは慌ててこうもりに囁いた。

「あの……ごめんなさい……悪かったよ。分かったから

その……あまり大声を出さないで。母さんが起きてきて、パニックになっちゃう……」

こうもりはそれを聞くと、少し落ち着いて怒鳴るのをやめてくれた。
「……ふん。いいだろう。お前のお袋が俺様を見て、外におっぱり出されるのも困るし。いいか、よく聞け。俺様の名前は、デイスパーだ。姓はない。姓など要らん……そんな面倒なもの。人間は、姓というものを盾にして有名になる奴がいるが、インプにとっちゃ、そんなもんで有名になったって嬉しくもなんともない。いいか、名声や栄光は自分の手でぶん捕るもんなんだ。だから姓をもつ人間は、俺様達異界の者たちから下等生物として見られるんだぞ」

こうもりは小さな胸をいっぱいに張って自慢した。

アデルはこんなこうもりにも名前があつたんだと、少し意外に思った。

「なんだ？ 俺様に名前があつておかしいか？」

こうもりはまたアデルの心のなかを見透かした。アデルは不思議に思っ
てこうもりに問うた。こうもりはそれを聞くと目を見開き、また大声を出しそ
うになったが、さっきの話を思い出し、小さめの声で怒ったように言い始めた。

「まさかもなにも 当たり前だ。俺様を誰だと心得る。異界からの使い、インプ様だぞ。しかもインプの中でも階級の高いものだ。新米魔術師の心の中など簡単に見透かせる」

デイスパーはここで一度切って、アデルの顔を見た。

「テレパシーを使えるってことだ。ま、お前が一人前の魔術師になった暁にやあ、そういうこともできなくなるがな」

「イ・・・インプ？」

アデルは聞きなれない言葉をきいて、思わず聞き返した。こうもりはまたもや目を見開いた。

「お前、インプも知らないのか？・・・ったくしょうがねえ奴だな。・・・インプは、異界の小悪魔のことだ。分かるか？　ちよつとした魔術も使える。新米魔術師が生まれるとインプが順番にこの世に来てお前らに魔術を教えたり、しもべとして下につかえる。

言っておくがな、俺様はお前なんかのしもべには死んでもならないつもりだからな。覚えとけ！　ま、大半の魔術師は魔術の力を得た後すぐ死刑にされちまうから、最近は俺たちインプの出番もなくなってきたわけよ。わかったか？」

こうもりはここで言葉を切り、疲れたというように布団の上にストンと腰を付けた。

「異界からここまで、一気に来て疲れてるんだからあんまり話しかけるなよ・・・」

デイスパーは小声で言った。

アデルは今のこうもりのグチを無視して、さっきの話を頭の中で整理していた。

ふと、アデルの頭の上に一つのクエスチョンマークが浮かびあがった。

「ちよつと待って。君、インプなんだろ？　ならどうしてこうもりなんかの姿になってるんだよ」

「これか？」

デイスパーは、こうもりの羽の部分を指した。アデルが頷くとデイスパーは少し得意げに話し始めた。

「これは、俺らインプがこの世に降りてくるときに、そのままの姿じゃあ目立って落ち着いて魔術を教えることができなくなるからだ。それに、俺たちの本当の姿を見たら　ヒヒッ・・・お前ら人間

は、腰抜かしちゃうよ。だから降りてくるときには、何かの動物、もしくは小さな虫みたいな目立たないものに姿を変えてくるんだ。そういう法律がある。俺様の場合、このこうもりの姿が一番居心地良かったんで、このこうもりの姿のままなんだ。さあそろそろ質問攻めはやめてくれないか？　じつとしてるのは俺様の性に合わん。さっさとこの家を出るぞ」

アデルはハツとして時計を見た。もう五時五十分・・・母さんたちが起きてくる時刻だ。アデルは急いで枕元の荷物と着替えに手を伸ばした。それと同時に上の方からガチャリと部屋の扉が開く音がした。思った通り、母さんが起きだした。

アデルは急いで階段を駆け下りた。

「アデル？　アデルなの？」

母さんの声が近づいてくる。アデルはテーブルの上の便箋を確認し、台所からパンと水をひつたくと、玄関を飛び出した。鍵は持たない。もう必要ないだろう。

扉の隙間から、母さんのブルーのネグリジェがちらりと見えた。

「おい。俺様が肩に居ること、忘れてないだろうな。さっきから五回も落ちそうになってるんだ。もうちょっと気の利いた歩き方をしろよ」

アデルが歩き始めると、すぐにディスパーがグチをこぼした。

アデルとインプは、イースタンビレッジの終わりの場所まで早足に向かっていた。ディスパーは図々しくもアデルの肩につかまりながら、さっきから文句をぶつぶつ言っている。

「うるさいなあ、急いでるんだから」

アデルは腕の時計を確認し、そろそろイースタンビレッジの住人が起き出してくる時刻になっていることに気がついた。

「あの　デイスパー、予定より時間が遅れちゃったから、少し走るよ。いいね？」

アデルは自分の肩の上で未だ懲りずに文句を言っていたこうもりを黙らせ、初めて呼ぶ相棒の名前に少々戸惑いながらも言った。

しばらくすると、デイスパーは肩の上でゆすられているのが嫌になつたらしく、羽をバタバタとさせてアデルの前に飛び出した。

「それにしても　おい新米魔術師、どこに行けばいいのか分かってんのか？」

しばらくして、デイスパーが疑わしげに聞いた。だした。

「分かつ・・・てるさ。国、王から、地図を、渡、されて、あるから」

アデルは走りながら途切れ途切れに言った。

「・・・地図？　国王？」

デイスパーは、そんな話聞いていないぞというように顔をしかめた。「どうということだ？」

「ちよつと、待つ・・・て、いったん、止まって、歩き・・・ながら話す・・・から」

アデルは走る足の速度を緩め、止まってぜいぜいと息を吐き出した。

デイスパーはアデルが急に止まったので驚いて急ブレーキをかけた。「あぶねえな。急に止まるなよ」

「君が話しかけてきてまともに走れないからだよ。・・・でも、もうすぐイースタンビレッジも村境のほうだから、走らなくても大丈夫」

「あつそ。で？　何だよ国王とか地図とかって。俺様はそんな話、全然きいてないぞ」

デイスパーは不満そうに言った。

「君、異界に居るときに聞いてこなかったの？　・・・君って僕

のことよく知ってたから、宝探しのことも聞いてるんじゃないかと」
デイスパーはチツと舌打ちをするとアデルを見つめた。

「宝探しのことはチラツと聞いているさ。けど、それがなんでこの国の王と関係するかが分からん」

アデルはハアとため息をついて歩きながら、今までのことをかいつまんでインプに話した。

話し終わると、アデルはデイスパーを見つめ、反応を見守った。

「その国王、怪しいな。何か裏にありそうだ。 ん？・・・ア

デル、気をつけたほうがいいぞ」

「え？」

といったときには、もう遅かった。

身体が軽くなつたと思った次の瞬間、アデルの尾骨に激しい痛みが走った。

「っ・・・痛つてえゝ！」

アデルは情けない声を出して、涙で霞む目を上に向けた。何メートルか上の方で、デイスパーが見下ろしている。

「おい、大丈夫かあ？・・・お前鈍感だなあ。俺様がちゃんと気をつけるといったのに」

アデルはムツとして言い返そうと口を開きけかたが、人の足音が聞こえたので、慌てて喉まできた言葉を飲み込んだ。ヒュツという音は、デイスパーが人間離れ、いやこうもり離れしたもののすごい速さでどこかへ隠れた音だろう。アデルは落とし穴らしきもののなかで、目をつむりながら、どうかあの足音が人食い人種のもものではありませんようにと祈った。

「へへ。つかまったようですね。この深い穴ならあいつだって抜け出すことはできないでしょう」

上からかすれた男の声が響いた。アデルは閉じていた瞼をそつと開いてみた。

「当たり前だ。このジャッキー様が作った穴だ。やっとあのコソ泥を八つ裂きにできる。はっはっは」

アデルは八つ裂きという言葉でひやりとした。まさか、本当に人食い人種？

「さて、捕まえるとするか。あいつだって、もう逃げられやしない」二人の男の満足げな笑声と共にはしが下ろされた。

アデルは恐ろしくなって隅のほうへ後退り、もう一度両手で目を覆った。

！

「ありや？・・・お前さん、誰だ？」

すつとんきような声をあげて、男はアデルに近づいてきた。

「・・・へ？」

アデルは両手の隙間からそつと目を出して目の前の人を見た。

普通の人。見たところ、がっしりとした体格で、ひよろひよとしたアデルなんて握りつぶせそうだ。しかし、どうみても人食い人種にはみえない。アデルは両手を下ろして、大きく安堵のため息をついた。よく考えてみれば、イースタンビレッジとノーザンビレッジの境に、ジャングルなんて無い。

「大丈夫か？ 坊主、どうした。ほれ、もっとにこっちに来てみな。なにとつて食いやしねえから」

男の太い腕がアデルを捕まえて引き寄せる。

「ん？ 坊主、見ねえ顔だが、どこからきた？」

アデルは慌てて立ち上がってできるだけ礼儀正しく自己紹介をした。

「あ 僕はイースタンビレッジから来ました。名前はアデル、いえジョン・・・えつと・・・ジョン・ハッターです」

アデルは危うく本名をいそふになり、ひやりとした。国王から、旅のことや、アデルの個人情報は極秘だと、厳しく忠告されているのだ。

「ほう。イースタンビレッジから。あの魔術師が生まれたっていう不吉な村ねえ・・・」

アデルは不吉な村というところで力チンと来たが、必死で我慢して笑顔を作った。

「はい。ここを通ろうとしたら、落ちちゃって。その……すみません」

「はっはっは！ いいんだ、坊主。すぐ上に上がらせてやるから」
男はがっしりとした大きな手で、細くて色白なアデルの手を取った。
「おい。ジャッキーさん。どうしたんスか？ あのコソ泥、捕まえました？」

上からさっきのかすれ声が聞こえた。

「いんや、あのコソ泥じゃねえ。ちっさい坊主が間違っって落ちちま
つちたんだ。今引き上げるから、手伝ってやれ」

ジャッキーと呼ばれた男が、アデルを引きずりながら大声で叫び返す。

アデルは再び太陽の元に戻ると、久しぶりに安堵感にひたった。

「で？ 坊主。お前このノーザンビレッジになんの用だ？ ん？

家出か？ 迷子か？」

男はさっそくアデルに問いかけた。

「え……えつと はい。あの、家出です……」

アデルは仕方なく嘘をついた。

「はっはっはっは！ そうか！ 家出か。まあいいぞ。宿は一応俺
んところにな。しばらくは宿代なしでもいいぜ。決まりだ！ 俺
は先に行ってるから、こいつに連れてってもらいな。本当は今、仕
事中なんだ。女房にまかせ切りじゃあ、あとで酷いからな」

男は勝手に決めて、アデルにお茶目にウイंकを残すと、さっさと
行ってしまった。

アデルはしばらく呆然として大声で笑う男の背中を見届けた。

「……ったく。おい坊主、ジョンとかいったっけ？ 俺につ
いてこい。ジャッキーさんの宿まで、連れてってやる」

もう一人のかすれ声の男が言った。

「あ はい」

アデルは茂みに隠れていたディスパーに目配せをして、男の後を追
った。

「俺の名はダンだ。さっきの人が、ジャッキーさん。おれはジャッキーさんの向かいで、果物を売ってる」

男は早足でせかせかと前を歩きながら、アデルに説明した。

「・・・そうなんですか。・・・それであの、さっきの落とし穴は、いったい何なんでしょうか」

アデルが質問すると、ダンは急にピタリと立ち止まり、鬼のごときの形相で振りかえった。アデルは驚いて、無意識に後ずさる。

「え・・・す、すみません」

男はアデルの言葉を無視して怒りで震える声で話した。

「あの落とし穴はにつくき、コソ泥ネコのもんだ。あのクソにやんこ、毎晩毎晩うちのりんご盗みやがって！ 村の皆も迷惑してんだ。不吉な黒猫め。今度こそひつつかまえてやる！」

吐き捨てるように言くと、ダンはまだもとの方向を見て、ズンズンと歩き始めた。アデルはダンの反応に戸惑いながらも急いで後を追う。

しばらく行くと、ノーザンビレッジの賑やかな市場が見えてきた。イースタンビレッジでよくやっている、骨董市のような店が、道の隙間なく開かれている。溢れんばかりの人々が、興味津々といった様子で商品を眺め、手にとって感触を確かめたりしていた。人が多いので、盗人や喧嘩が頻繁に起こるのが欠点だが、殆どの人は、この窮屈な買い物を大いに楽しんでいるようだ。そばの店で、陽気な売り子が客に話しかけ、商品の交渉が行われている。アデルは見ているだけで、わくわくしてきた。なにしろほかの村の様子を見たことなど、これが初めてだ。ノーザンビレッジは、すぐく賑やかで、食べ物ならどの村よりも質がよく新鮮で美味しい。それに、いろいろな国からたくさん輸入しているので、何でもあると評判だった。

「・・・・随分、賑やかですね」

アデルは思わず口に出していた。するとさっきまで機嫌が悪かったダンが、にっこり笑って嬉しそうに喋り始めた。

「そうだろう。もっと奥まで行くと、もっと賑やかになるぞ。ジャ

ツキーさんの宿ももう少し行つた先だ。俺も、この辺りに住んでるんだ。果物屋でな。ここの食い物は、この国で、いや世界中で一番うまいといわれてるんだ。種類も豊富だしな。なにより、美味くて新鮮！ ああ、そっちの村でも有名だろう一度食つたらもうこの村に居たくなる。ここは最高の村だよ。さ、もう少しだ」

アデルは今まで、自分の村が一番だと思っていたが、どの村の人も皆そう思っているのだと、と初めて知った。

そこからは、同じような賑やかな店が立ち並ぶばかりで少々退屈してきたアデルは、ふと横の景色な目を移した。すると、イースタンビレッジの見覚えのある家々が小さく見え、そしてその右側の奥には、ノーザンビレッジの商店街にはさまれて、アデルがこれから行くことになるまさにあの「怪物の洞窟」が見えた。アデルは瞬時に青ざめて、急いでリュックの中から地図を取り出し確かめてみた。やっぱり、間違いない。あそこが「怪物の洞窟」だ。

アデルが青ざめて立ち止まっていると、先をズンズン歩いていたダンが戻ってきて、怪訝そうにアデルの顔を覗き込んだ。

「どうした？ 何やってんだジョン」

アデルはハッと我に返り、咄嗟に地図を後ろに隠した。

「な、何でもありません。大丈夫です。……さ、行きましょう」

ダン是不思議そうにアデルの後ろを気にしたが、肩をすくめると、すぐに歩きはじめた。

危ない危ない……。こんな人に「怪物の洞窟」のことなんて聞いたら、また機嫌を悪くして僕が行くのを引きとめるだろう。拳句の果てに、僕が魔術師だってことも、知られてしまうかもしれない。そしたら王宮に通報されて、旅は失敗。僕はきっと、すぐに死刑だ。そして、母さんや父さん、アルまで

「おい、ジョン！ なにボーっと突っ立ってんだ。もうジャツキーさんの宿の前だぞ。」

アデルはビクリと身を震わし、ダンのほうを見た。

「ほら、あの看板を見てみる。きっと一生、忘れられなくなるぜ」

アデルはダンの言葉に疑問を抱きながら、細長い指の指す方向に顔を向けた。そしてアデルは、その看板を目にしたまま、口をポカンとあけ、硬直してしまった。

ダンの言った意味が、今になってひしひしと理解できる。

アデルの見上げた先には

「ジャツキー！」

というどでかい看板が、てかてかと光っていた。

「ジャ　ジャツキー・・・？」

アデルは目を見開いて呟いた。ダンはいれ顔で、溜め息混じりに説明した。

「ジャツキーさんは、自分の名前がすごく気に入ってな。ついに店の名前までジャツキーにしちまったんだ。ジャツキーさんによると、自分の名前は、女房とこの宿の次に愛してるってさ。ジャツキーさんの名前を付けた名付け親の叔母さんにも、ひどく感謝してた。・・・まったくおかしい人だよ」

ダンは呆れながらも、親しみのある優しい笑い声をあげ、突っ立ったままのアデルを背を押して、大きな扉を開けさせた。

ジャツキーの宿は、思ったよりも大きかった。中に入ると、調子の良い音楽が耳に飛び込んできて、同時に楽しい人々の笑い声や話声が、あちこちで飛び交う。それに、皿がカチャカチャいう音や料理の注文をとる女性の威勢のいい声が重なり、ここは外より賑やかだ。後ろで扉が開く音がして振り返ると、ダンが帰るところだった。アデルはダンに向かって軽く会釈をして送り出すと、ディスプレイをマントで隠しながら、そろそろと奥に進んでいった。キッチンは二つあるらしく、狭い廊下の左右から、なんともいえない、いい香りが漂ってきた。アデルが右側のドアの取っ手を握んだ途端、ドアが勢いよく開いた。

「あいた！」

アデルは鼻と前頭部を強く打ち、よろめきながら涙目で前を見た。ひげもじやの男が、大きなお盆を幾つも抱えながら、アデルの顔を

覗き込んでいた。それが、この宿の主であることに気づくのに、数秒かかる。ジャッキーは、アデルが誰か分かると、にっこり笑って至近距離なのにも関わらずどこでかい声で言った。

「おうジョン！ よくきたな！ お前の部屋は二階の一番奥だ。あとで夕飯持つてやるからな。待ってる。今俺は忙しいから、詳しいことは明日、教えてやるから」

ジャッキーはアデルが何か言う隙もなくいうと、食堂のほうへ足早に向かった。デイスパーがもぞもぞと動いたので、アデルは慌ててマント抑えながら階段を駆け上った。

「お前、どうすんだよ。あの怪物の洞窟はもう見えてたじゃないか。こんな宿に泊まったって、金の無駄だ。サッサと宝を探しに行かなきゃ。とりあえず、一個目の寶石を見つけてからじゃないと、なんのための宝探しなのかさっぱりだ。それに俺様も早くお前の魔力がどれだけなのか見てみたいしな。・・・おい聞いてんのか？」

部屋に入ると、デイスパーが詰めていた息を吐き出し、勢いよく喋りだす。アデルはふかふかのベッドに倒れこみながら、デイスパーの話を何とか頭に入れながら聞いていた。

「大丈夫だよ、デイスパー。お金はしばらくかからないらしいし、ちよつとくらいこの村にいてもいいだろう？ ・・・僕、ノースビレッジにはずっと前から行ってみたいと思っていたんだ」

デイスパーはため息をついて、アデルの目の前に着地した。

「お前は呑気だな。これから危険で恐ろしいと所へ行くつていうのに・・・ま、それは置いといて。俺様が気になるのは、あのダンとかこの宿の主、村の者たちが捕まえようとしてた、コソ泥ネコつて奴だ。そいつになんか引つかかる。いくらすばしっこい猫だって村中の食い物を盗み出して、誰も捕まえられないってのはおかしいだろ？ 俺みたいに、インプが猫に変身したか、あるいは動物人間か・・・そういう可能性はあるな」

アデルはそれを聞いてがばりと起き上がった。

「へ、変身する人間なんて、いるの？ ましてや動物になんか・・・

・インプだって、魔術師が生まれたときにしか、異界から降りてこないんだろ？」

デイスパーはすぐさま答えた。

「変身人間だっているさ。この世界にはインプだっているんだからな。そうだろ？ インプも、強い力を持ったインプなら悪戯をしに時々降りてくることもあるんだ。人間が気づかないだけで、インプや変身人間は、結構いるぞ」

「へえ……」

アデルは驚いて口をポカンとだらしく開けた。

「じゃ、今、僕らのまわりにインプや変身人間はいるの？」

アデルは辺りをチラリと見やり、不安そうに言った。

「いや。もしそいつらがここにいたら、この俺様がとくに妖気で見つけてるさ。人間界に勝手にこれる奴らは皆力があるから、妖気が溢れるほどあるんだ」

「ふーん……じゃ、大丈夫なんだ。ね、ちよつとの間でいいから、ここに居させてよ。最近はいろびつくりすることが続いて、疲れてるんだ」

アデルは大きく伸びをしながら弱々しく言った。

「ふん！ 勝手にしやがれ！」

デイスパーは言いながらベットの端に寝転がった。

「なんだ。君だって疲れてたんじゃないか……」

アデルはもう一度、ベットに倒れこんだ。

「おい……おいアデル！」

デイスパーが騒がしく少年の名を呼んだ。

「……なに？ 眠いの……まだ夜だろ？」

アデルは真夜中にたたき起こされて不機嫌に言った。

「もう朝方の三時だ。とつくに昨日から今日になってるぞ！ 月だって、東に傾き始めてるぜ！」

デイスパーは珍しく興奮しているようで、少々意味の分からないことを口走った。

「デイスパー。月は東から西へ動くんだ。明け方の三時なのに東に傾くわけな」

「わかったわかった。いいからとにかく外を見てみる。きっと、腰抜かすぜ」

デイスパーが鼻息荒く急かすので、アデルは寝ぼけ眼で窓の外を見てみた。瞬間アデルの眠気は一気に吹っ飛んだ。それもそのはず、一匹の巨大なトカゲに似た怪物が、商店街の中をのた打ち回っていたのだ。住民は大騒ぎで、悲鳴を上げながら逃げ回っている。勇敢にも大きな斧を持って巨大トカゲに立ち向かう男たちもいたが、すぐさま強烈な尾つばのパンチが飛んできた。男たちは四方に飛び散って、うめき声を上げ始める。

「うつわっあ！」

アデルは思わず声を裏返した。

「な？ な？ すいだろ？」

デイスパーは窓にべったりと張り付いて、瞳をぎらぎら光らせている。今までで一番酷い顔だ。

「な、なんなんだよ、あれ。気味悪い！」

アデルも窓にべったりとくっ付いた。

「ふむ……ありやあインプだ。ってことは、俺様の仲間だぞ。ふふん、まあ少しばかり力みすぎた異界の使いってことだ。悪戯にでも来たんじゃないか……面白そうだな。なあ行ってみようぜ」
デイスパーは早くも扉の方に行っている。

『なるほど。だからデイスパーは興奮してたのか』

アデルは頭の端で、ちらりと思った。

「そうだから前だ。俺様の仲間が目の前にいるんだから、興奮して何が悪いんだ。ふん！」

デイスパーはぎろりとアデルを睨んだ。

『しまった。デイスパーは人の心が読めるんだっけ』

「ああ！ ややこしいからいろんなこと考えるなよ。俺様には嫌でもわかつちまうんだから」

こうもりはじれったそうに言った。

「・・・分かった。気をつけるよ」

アデルは肩を竦めて素直に謝った。早めに謝っておかないと、デイスパーはすぐ根に持ってすねるからだ。そう思った途端、アデルは首を傾げた。自分はこのインプと、たった一日しか過ごしていないのに、何故かこの小さな旅の道連れのことを、まるでずっと昔からの友達だったかのように、たくさんを知っていることに気づいたのだ。

「よし！ 分かったならいくぞ。この騒ぎにまぎれて怪物の洞窟にいけるかもしれないしな。うん」

デイスパーの怒鳴り声にハツとして、アデルはまだ少しぼうつとしながらも曖昧に頷いた。

デイスパーはアデルが頷くのを見たか見ないかのうちに部屋を飛びだしていった。

「え ちょ、ちょっと待てよ！」

アデルは慌てて上着とリュックを持って、デイスパーの後を追った。

第4話

外は寒い上に、かなり荒れていた。多くの村人はすでに逃げる用意をして、いつでも村を出ていけるようにしている。ジャッキーのおかみさんは、勇敢にも夫とともに巨大トカゲを睨みつけ、木の棒（驚くほど太い）を振り回している。

アデルは、巨大トカゲを間近で見て呆然とした。宿の窓越しに見るより巨大で、前長二十メートルはあるだろうと思えた。トカゲはおかしな奇声を発して村人を威嚇しながら、店の食べ物を貪っている。

その毒々しい、モスグリーンの皮膚は、ぶかぶかのトレーナーのように垂れ下がり、動いたびブルブルと気持ち悪く揺れる。口は驚くほど裂けていて、その避けた口から、血のように赤い二股の舌が、行ったりきたりしている。

アデルは、この大変なときによくも僕は眠っていられたな、と呑気な自分に驚いた。

一方デイスパーは、生き生きとした表情で巨大トカゲを見つめ、沼のようにどんよりと曇った焦点の合わない視線を自分にむけようと必死に追い回している。アデルはしばらく、デイスパーと巨大トカゲの滑稽な様子をぼんやりと眺めていたが、不意に人の気配を感じ、初めてダンが隣に来ていたことに気づいた。ダンは一瞬アデルが自分に気づいたと分かると、腰をかがめて囁くように話し始めた。

「あのトカゲみたいなきよる目の怪物、何だか分かるか？ 俺は多分……いや 有り得ないな……あいつが此処に、くるわけがない…… まあとにかく、夜中にいきなり現れて、商店街の食いもんを荒らし始めたんだ。食いもんを全部食われちゃったら、俺らの生活もできないし、ノーザンビレッジの評判も落ちちゃう。……あのコソ泥ネコに加えて、厄介なやつが来たもんだ。見ろよ、あの無敵といわれたジャッキーさんまで苦戦してやがる。」

……これ以上酷くなるんなら、俺はこの村を出て行くつもりだ。いくら最高に良い所でも、こんな恐ろしい怪物やコソ泥ネコがいたんじゃない。頭がいかれちまうよ」

どうやらダンは、愚痴をいいに来たらしい。アデルは適当に相づちをうち、巨大トカゲと村人の戦いを眺め始めた。不思議なことに、自分への危機感は、全く感じなかった。しばらくすると、ダンは愚痴を他の人にも言いに行こうと、アデルの傍から離れ、同じように荷物を背負ったおじさんのところへ行った。

ダンが行ってしまうと、ふと、アデルの頭のなかに「魔法」という二文字が浮かんた。

そうだ。僕は魔術師なんだ。まだ、たった一度もちゃんとした魔術も使えないまま、無理矢理この旅に出された。

……僕はいつたい、どんな魔法が使えるんだろう。僕の力でここに居る怪物を倒せるんだろうか。この人達を、この村を救えるんだろうか。

アデルは急に、今ここで魔法を使って、巨大トカゲを倒してみたくなった。

心臓がドクドクと脈打ち、鼓動が早くなっていくのが分かる。自分の研ぎ澄まされた五感が更に鋭くなる。辺りの様子が、手に取るようにわかった。トカゲの振り回す尻尾が、空を切る音、村人たちの叫び声や、呻き声、建物の崩れる音。全てがアデルのためにあるかのように、あらゆる音、感触が身体の全ての部分から、沁みこんでくるようだ。

力が、湧き上がる。今なら、魔法が使える！ 確信だった。

ダメだ……。こんなところで魔法を使ったら、すぐに魔術師だということがばれてしまう。

ほんの少し残っていた、自分の中の冷静な部分が、警告信号を発している。

……この旅は極秘だと、国王に言われたじゃないか……。こらえろ。

そう思った途端、先までの興奮が、嘘のように消えていく。

「危ない！」

突然アデルの背後から、悲鳴に似た叫び声が聞こえた。ハツとして我に返り目の前を見ると、トカゲの巨大な尻尾が、アデルめがけて勢いよく飛んでくるところだった。まさに絶対絶命。

この状態では、思いきり宙を舞って大怪我をするだろう。いや、怪我ではすまないかもしれない。アデルは、トカゲの巨大な尻尾が飛んでくるのを、切羽詰った状況にも関わらず、スローモーションのようにゆっくりと見ていた。そう、さつき確信したときと同じ感覚反射的にアデルはしゃがみこみ、思わず両手で頭をかばう姿勢をとった。

もうダメだ！

「バーン！」

耳元で、鼓膜が破れるほどの爆音がし、アデルは一瞬、意識がとんだ。しかしすぐに意識を取りもどし、慌てて次の爆音に備えようと耳に指を突っ込んだ。目はギュツと瞑っていて真っ暗なはずなのに、目の前がチカチカする。頭が痛い。ものすごい風も吹いて、何かとても重いものが、はじけ飛ぶ感じがした。

僕は飛ばされたんだろうか　いや違った。アデルはしっかりと土を踏みしめて、さつきと同じ姿勢のままだ。耳が元のように聞こえていることに、しばらく気づかなかった。辺りは、信じられないくらいシーンとしている。

ゆっくりと、立ち上がる。すこしよろけたが、大丈夫、怪我はしていないようだ。辺りを慎重に見回してみても、不意に気づいた。

辺りがぼやけて見える。

アデルは、自分の周りに薄ピンク色の、丸い膜が張っているのに気づいた。その膜が揺れて、周りがぼやけてみえたのだ。村人は皆アデルに注目していた。前を見ると、信じられないことにさつきまで暴れまわっていた怪物が、かなり遠くの道まで飛ばされて、ぐったりとしている。

いったい何があったんだ．．．？ トカゲは、僕がやったのか．．．？

アデルは不意に、自分がとても恐ろしいことをしたような、言いようのない不安を覚えた。頭はパニック状態で、何があったのか、まるでわからない。アデルは胸を押さえ、Ｔシャツをギュツと握った。落ち着け、アデル。まずはデイスパーを探して、何があったか、聞かなくちゃ。

気がつくと、あのぼやけた薄ピンク色の膜は消えていた。

「何なんだ、今は．．．」

村人の一人が呟いた。

静まり返った商店街では、その呟きがやけに響く。次第にある集団にざわめきがおき、次々と広がってあつという間に人々は騒ぎ始めた。

「今の見たか？ あの怪物が一瞬で飛ばされちまった．．．まるで．．．魔法だ」「でも怪物は死んだみたいだから、良かったわ．．．あの子何者かしら」「あーあ。俺の店がめちゃくちゃだ」「まさか、魔法なわけないだろう」「．．．隣村のイーストで、魔法使いの子が出たって言う話も前にあつたじゃないか．．．」「早くしろ！ 魔術師だ！」「王宮に連絡をとれ！ 今すぐ追っ払ってもらわなきゃ おい押すなよ」

アデルはそんな話を耳で受け流し、ぼんやりと肩を落として佇んでいた。身体に力が入らない、自分の手足が、他人のもののように感じる。重い．．．．．

何度か、足を踏まれたり耳もとで何か怒鳴られた気がしたが、アデルに直接触れる人は一人もいなかった。ジャッキーやダンが、混乱の色を燈した目でアデルを見ながら、何も言わず通り過ぎて言った気もした。そのまま人混みに流されて、アデルはいつのまにか、巨大トカゲの前まで来ていた。

「よう！ アデル、すっげえなお前」

アデルは、真下からの拍子抜けた声に、飛び上がって尻もちをつい

た。

「！　デイ、デイスパー。君、無事だったの？　そうだ　さ
っきのは一体何？　僕がやったこと？」

アデルは急いで立ち上がりながら、近くに人がいないのを確かめて、
小声で言った。

「ふうむ．．．．あれは多分、バリアだな。うん」

デイスパーは突然考え込みながら言った。

「　　バ、バリア？」

聞きなれない言葉に、思わず聞き返す。

「なんだお前、バリアも知らないのか？　ホントになんにもしらね
えんだな、お前．．．．」

デイスパーは面倒くさそうに言う。アデルはむっとしたがそこは
押さえ、デイスパーに早く説明するよう急かした。

「バリアはな、魔術師になった奴が、必ずもらえる能力だ。もち
ろん異界の悪魔様からな　自分が危険にさらされたときにだけ作動
して、ほとんど全てといっていい攻撃から守ってくれる。　まあ

簡単に言っちゃえば、自分の身を守ってくれる不思議な膜ってここ
だな。どうだ、分かったか？」

アデルはいまいちよく解らなかったが、先のことを聞きたかったの
で曖昧に頷いた。

「それで．．．トカゲはそのバリアのせいで飛ばされたの？」

「そうだな．．．あいつはきつと、お前のバリアで飛ばされたんだ。

俺様が思うに、お前は多分風使いだ」

デイスパーはそこで一旦言葉を切り、さっぱり解らないという様
子のアデルを見て、慌てて付け足した。

「　　聞かれる前に言つとくが、魔術師の中にも分類があつて、
それぞれ得意とする分野があるんだ。一般的には、この五つがある
火、陽、水、風、光。そして特別なものとして　闇の力と
その他の能力。　その他の能力　は、一般的な五つ以外の、珍し
い力を持つ魔術師だ。こいつは滅多にいない。　その他の能力　を

持っているやつは、将来、三大魔法使いになったり、あるいは、闇の魔術に目覚めて悪魔になっちまったり まあ闇の世界にとっちゃ偉大なことらしいが とにかく歴史に残るような、偉大なことをすると言われている。しかしこの力は、遺伝とかの類は一切関係なくあるものだから、どんな魔術師でも可能性は十分にあるわけだ。もちろん、お前にも。

闇の力は、その名の通り、生まれながらにして闇の魔術、たとえば 死の魔法だったり、苦痛の呪文もまあ魔法界では一般に使ってはいけないことになってる呪文の、殆どだ を身につけているものだ。だがこっちは、その力を持っている代わりに他の魔法が使えない場合が多いんだ その他の能力のある奴は、その能力以外にも一般的な五つの力を分類で強く持っていたり これは本当にごく稀なことだが、全ての魔術に渡ってものすごく優れていて、間違いない歴史に残るような者もいる。だが 闇の力 をもつ者は あ 最初はどんな魔術師も、その才能と魔力は持っているんだ。たとえば、闇の力 を持っている奴でもな 自分は闇の力を持っている、と本人が確信した時点で、知らずうちに必要な魔力が消え、その分の力が闇の力に加算されるんだ。これは闇の力がもともと強い奴に多くある。 じゃあここでさっきの五つの分類の話に戻るが・・・たとえば、お前は風使いだから、他の魔術師より風についての魔法が優れている。さっきのバリアも大きく見れば風の魔法に入るから、お前が風使いであることは確信に近い」

「え さっきのバリアって、強かったの？」

「ああ ありゃあ、百年に一度だって、滅多に見られないぜ」

「ふーん・・・」アデルはあまり実感のないまま、先を続けるデイスパーのほうに、耳を傾けた。

「まあ、バリアは自覚のないものだから、お前がピンと来ないのも解るが・・・フム・・・お前は稀に見る その他の能力 者かもしれない・・・」

デイスパーは呟くように言いながら、アデルの中の魔力を見透か

すかのように、真っ青な瞳をじろじろを覗き込んできた。

「ぼ　僕、魔力がそんなにあっても、迷惑だよ・・・デイスパー、人の目をじろじろ見るのやめろよ　すぐ居心地が悪い」

デイスパーは、アデルの言葉を見殺して、一人で考え込み始めた。アデルはデイスパーがとりあえず自分をじろじろと見るのをやめてくれたのでほっとし、こうもりからそっと離れた。

アデルは好奇心と恐れを入り混じらせながら、巨大トカゲの体に近づいた。トカゲの頭は、かなり先のほうまで垂れ下がっていて、大きなギョ口目はピタリと閉じている。身動き一つしない。本当に死んでしまったのだろうか。アデルはトカゲの尻尾の先を、そっとなげた。　途端にアデルの体全体に、やけに響くドスの聞いた声

が、どっと流れ込んできた。

《俺の体から離れるな小僧。俺は、インプだ。お前の横に居るへなちよこの弱っちいインプと一緒にされちゃ困るけどな　俺はもつと妖力を持ったインプだ。お前がぶっ飛ばしたこのトカゲに乗り移ってる。名前はアスター。あまり時間がない。唐突に言う。さっきのバリアの力で分かったが、お前はかなりの魔力を持っている。ああ、生まれながらにして、だ。お前のことは、よく知ってる。異界でも有名だし、俺は昔、お前によく似た野郎の教育係をやっていた。・・・ま、そんなこと、今は関係ない。お前の魔力は、魔術師のなかでも、相当な力だ。百年前に死んだ、風使いの力に良く似ている。お前も知ってるだろう？　イーストビレッジにやってきた、伝説の魔術師を》

アデルは呆然として全身から血の気が引いていくのを感じた。
なんだ？　こいつ・・・インプ　？

もしかして、さっきデイスパーが言ってた力の強いインプのことか・・・。

でもそのインプが、僕に何の用だろう。しかもなんで、あの言い伝えの魔術師のことを知ってるんだ？

アデルは顔を歪めて、トカゲの全身に視線を滑らした。どこかに、

インプの妖気が溢れ出しているところがないか、見える範囲で探してみる。しかし、途中で別の聞きなれた声が割り込んできたので、アデルの思考は中断され、頭の中は大騒ぎになった

《ようアスター。俺様の相棒になんの用だ？》

デイスパーだ！ 咄嗟にアデルは思った。

《……おやおや。裏切り者のデイスパー様のお出ましかい？ 久しぶりだなあ……。千年前、お前に異界の牢獄に入れられて以来だ》

なんの話をしているのか、解らない。アデルは鈍く痛み始めた頭を抑え、苛々とインプの話に耳を傾けた。

《ああ。お前、いつ牢獄からでてきたんだ。力の強いインプだと思っただが、まさかお前みたいな囚人だったとは……。予想外だな》

さっきまで目を輝かせてトカゲの周りを飛び回ってたくせに、今その正体があるとすぐ態度をかえるな、デイスパーは

アデルは二人の会話を黙って聞きながら静かに思った。

《で？ アスター、こいつになんの用だ？》

《……ふん、さすがだな。一番いいところを、突いてくる。じゃあ俺も、早速だが この小僧、かなりの力を持っている。お前なんかにお守りをさせてるより、力のある俺が、こいつの面倒を見てやったほうがいいと思っただ。まあ……。簡単に言っちゃうと、この小僧を俺のところにくれ。ということだ。分かるだろ？ こいつの力、あいつの能力とそっくりだ。アーウィン・ノードリーのな》

アデルは驚いて目を見開いた。アスターが言ったアーウィンとは、アデルの遠いご先祖様の名なのだ。百年ほど前に亡くなったといわれているが、とても偉大な発明を幾つもした有名な学者だと聞かされていて、魔術師だったなんて、思ってもみなかった。それに、アスターはアーウィンのことを伝説の魔術師とも言っていた。まさか、伝説の人物が実在していて、しかもそれがアデルのご先祖

様？ そんなこと、ありえない。

アデルは混乱してきた頭をおさえ、インプの会話に聞き入った。

《……》

デイスパーは「アーウィン」という名を聞くと、途端に珍しく黙りこんでしまった。 その様子に満足した

のか、アスターは嬉しそうに嘲笑う。

《どうした？ 覚えているはずだろう》

アスターはずっと口を開かないデイスパーに調子をよくして、歌うようにアーウィンの名を口に始めた。

アデルは、今やガンガンと頭蓋骨に響く痛みに必死で耐えながら、どうということなのか考えた。しかし考えてみたところで、頭の痛みが酷くなるだけだ。

どういうわけか、インプたちがアデルの頭の中で言葉を交わすたびに、まるで頭を金棒で思いきりぶん殴られたような痛みが、何度も頭を突き抜けるのだ。アデルはとりあえず、自分の頭の中で何か言ってみることにした。早くこの痛みから、解放されたい。

《あの あのう……聞こえてますか？》

すぐにアスターの歌うような声が途絶え、それと同時に、デイスパーの息を呑む音がか微かに聞き取れた。

これでやっと、静かになった。

アデルは頭の痛みが消えていくのを感じ、ほっとした。のもつかの間、すぐに頭痛がし始めた。

《こりやたまげた。こいつ、テレパシー能力も持ってやがる。どこまですごいんだ？ この坊主、本当に欲しくなったぜ》

アスターが興奮気味に言ったのと同時に、デイスパーも割り込んできた。

《お、お前こんな能力も持ってたのか。早くもつと魔力を見てみたいもんだ》

二人同時に　いや、二匹同時に、しかも飛び切りの大声を頭の中で響かせられたアデルは、あまりの痛さに小さく呻き、気を失いそうになった。

アデルはすんでのところで気を取り直し、頭の中で二匹のインプに文句を言った。

《……二人とも、僕の頭のなかで大声出したりするのやめてよ。う……死にそう》

《あ　ああ。悪いなアデル》

デイスパーがすぐに謝った。すると、頭からすうーっと痛みが消えていくのをはつきりと感じた。どうやら二匹とも、アデルの頭の中にテレパシーを送るのをやめたらしい。

アデルはどつと疲れを感じ、その場にへたり込んだ。しばらくして顔を上げると、さっきまであったトカゲの巨大な尻尾は無く、ただ小さなトカゲが、アデルの青く澄んだ目を見上げていた。頭上で、パタパタを羽をはばたかせる音も聞こえる。

「大丈夫か？　アデル」

こうもりが心配そうに言った。

「本当は、人間の頭の中で長いことテレパシーを送りあうのは危険なんだ。ずっとやってると、その人間の体が弱って、死にしまう可能性もある」

アデルはそれを聞いて、首筋の毛が逆立つのが分かった。文句を言おうと口を開いたが、何を言おうか考えていると再び頭が痛くなりはじめたので、すぐにやめた。

「……しかし、インプとインプのテレパシーの会話に人間が入ってこられたのは初めてだ。すごいぞお前　で、お前、俺と組む気は？」

アスターがすぐ話をそらした。

「ない！」

アデルは即座に答えた。

「はは・・・やっぱりか。・・・ま、いい。魔力のあるお前が嫌だというんなら、仕方無い。それにそろそろ異界へ帰らないとな。今頃囚人が逃げ出した！　って大騒ぎしてるぞ。こりゃ面倒だ。ヒヒ」

アスターは言葉とは裏腹に混乱を想像して楽しむかのように小刻みに身体を揺らした

「じゃ、俺は異界へ帰る。・・・おい小僧、本当に俺と組む気は無いんだな？」

最後の最後までアスターは諦めが悪い。

「無いってば！」

アデルは思わず大声を出した。

「人の頭の中で大騒ぎしといて・・・僕が調子に乗って君と組むと思うかい？　悪いけど、僕はそこまで人は良くないんだ」

「ああ分かったよ。もう諦めたさ！　ふん」

アスターが言い終わったと思ったときには、もうその場にトカゲの姿は無かった。

「あーあ・・・あいつがお前の世話焼き係にならなくて、よかったな。もしあいつがなかったら、間違いなくお前は　闇の力　を操る魔法使いになってるぜ」

デイスパーは空を見上げながら呟いた。

「・・・ところでさっき、百年とか千年とか、いろいろすごい数言っただけど、君ら一体何歳なの？」

それをきくと、デイスパーはふふんと鼻を鳴らして、偉そうに言った。

「五千歳」

「！」

いつの間にか、夜は明けていた。

第5話

「ねえ本当にいいかな。何も言わずに出てきちゃっても」

アデルは前に行くインプに絶えず念を押した。

「だーから・・・大丈夫だって、さつきから言ってたんだろ」

面倒くさそうにこうもりが言う。

「でも　でもジャッキーさんたち、探してるみたいだったじゃないか。　　やっぱりまずいよ。言っておかなきゃ」

こうもりが苛々しながら振り向いて、心配性の相棒に顔を近づけた。
「あのな、お前を探してボッコボッコにするために、あいつらは血眼になって俺様たちを探してたんだ。魔術師にわざわざお別れの挨拶を聞いたがる変人がどこいる？　あ？　　お前はな、あの村で一つの魔法を使っちゃったんだ。それも特別強力な魔法を。魔術師とバレた以上、もうあそこにはいられない。よく覚えとけ。それが魔術師つてもんだ。長い間同じ場所にいることはない。　　できないんだ。仕方がないのさ。みんなそれを持ち越えてきてる。それが出来なきゃ、早死にするだけさ」
さすがのアデルもそこまで言われちゃ、首をすくめて黙り込むしかない。

アスターが異界へ消えていったあと、デイスパーはすぐこの村を出発し、「怪物の洞窟」へ乗り込むと宣言した。アデルはもう少しこの村に滞在したい気持ちもあり、一日だけだが、世話になった村人にきちんとして礼を言いたかったので強く反対したが、デイスパーはそれを無視し、「怪物の洞窟」へと（勝手に）進み始めた。アデルは仕方なく付いていくが、五分ごとにデイスパーに念を押し、しつこく何か言ってからでいいこうと催促していたのだ。

一人の魔術師と一匹のインプは、しばらくだまって進んだが、次第に道が険しくなり始め、山登りの経験のないアデルは、ついに音

をあげた。

「ちょ、ちよつとタイム。デイスパー、待つて」

「なんだ。もうバテたのか？」

デイスパーは早く行きたいらしく、鼻息荒く不機嫌に言った。

「そんなこと言つても、僕、山に登るのは初めてなんだ」

アデルはリュックから地図と水筒を出しながら、ボソボソと言った。

「はあ？ こんなもん山じゃなくて、丘みたいなもんだぞおい」

アデルはその言葉は無視して、旅のための地図を開いた。

王宮で渡された地図は手書きらしく、とても丁寧に書かれているが、やけに古びた感じがする。

最近書かれたもののはずなのに。

アデルは小さな違和感を覚えた。

「・・・ここが、怪物の洞窟」

アデルは地図の右はしのほうを指しながら呟いた。

「ああ。この辺が今居る位置だ・・・ふむ、まだ結構歩くな」

デイスパーはアデルから水をもらいながら横で言った。

「・・・デイスパー、これは？ 何か変なマークがあるんだけど」

アデルは目を細めた。

それはとても小さく、黒い染みのようであつたが、なにやら怪しげな臭いを撒き散らしていた。

「なにかな。何か、髑髏みたいだけど」

アデルは地図に顔を近づけた。

その瞬間だつた。その黒い染みが突然素早く動き、アデルを物凄い力で引つ張つていこうとしたのだ。アデルは、何か考える余裕もなく、ただ本能的に引つ張る力とは反対のほうに抵抗した。デイスパーもなにやら叫んで、アデルを地図と反対方向に引つ張った。両方に引つ張られたアデルは、最高に気分が悪い。

「バチン！」

と、ゴムがちぎれるような音と共に、アデルはデイスパーのほうに仰向けに倒れこんだ。

「……………」

アデルは顔を真っ赤にし、息を荒げているデイスパーをゆっくりと見上げ、無言の問いかけをした。

デイスパーはアデルをつかんでいた鉤爪を離し、地面に着地した。

「おいおい……この地図に魔力があるだなんてお前……一言も言っていなかったよな？」

反対に質問され、アデルは不意を打たれた。

「うん。でも　僕だって、こんなのが仕組まれているなんて全然知らなかった」

アデルは地図の黒い染みのような所を睨みつけた。

「なんなの、これ？」

デイスパーはふうと息をつくと話し始めた。

「こいつは、異界にしかないはずの小さな……うーん人間界で言うヒル……みたいな奴だな、うん」

アデルは「ヒル」と聞いた途端、くらりと世界が反転し、気絶しそうになった。

それもそのはず、アデルはこの世で最もヒルと名のつくものが大嫌いなのだ。

小さいころ、弟のアルと喧嘩をした日のことだった。悪知恵の働くアルが、悪戯でアデルのベットに近くの池で捕まえてきたのか、何十匹というヒルを入れたことがあった。そしてその夜の夜、アデルがベットに入った途端、ヒルがいつせいにアデルの背中に吸い付いたのだ。それはもう……言葉では言い表しようない恐ろしさだった。

アデルはその日から、ヒルを見ただけで飛び上がって泣き叫び、大パニックを起こしてまうようになったのだ。

「ヒ、ヒル？」

恐怖のあまり、アデルの声は震えていた。

「ああ。お前、ヒルが苦手なんだな」

デイスパーはアデルの心の中が分かったのか、ニヤニヤしながら言

った。

「異界では、このヒルを移動手段として使っている。こいつに吸われると、指定された場所に行き着くんだ。でも　こいつは、誰かが魔力を使って行き着く場所を指定しないと、吸い付いた奴を異次元に放り出すんだ。この魔法を掛けられる奴は、相当の使い手だな・・・しかしこの世界にも、魔力を持つものは結構少なくなってきたからな・・・おい、この地図を描いたのは王宮に居た奴の誰かだよな？」

デイスパーは真剣な表情で問いかけた。

「うん。多分・・・そのはず」

アデルは確信なさそうに小さく言った。

「・・・そうだとすると、王宮、もしくはこのトゥーマリアに、かなりの力を持ったお前以外の魔術師が居る可能性がある。ほぼ、確実にな」

「そうか。でも、トゥーマリアにはそんな人何処にもいないと思うけど。皆魔術師嫌いだし・・・。怪しいといえば、国王とか、あのティーナとか言う、王女ぐらいだと思うけど」

アデルは最後に見た国王の冷やかな微笑を思い出しながら言った。
「ああ。あの国王と王女は魔術師の可能性が充分にある。ま、確信は無いがな。とにかく今は、先に進もう。このヒルは俺が取り除いてやる。地図を開くたびにお前にパニック起こされたんじゃ、たままないからな」

しばらくして、一人と一匹は再び歩き始めた。地図によると、この辺りからは草や大きな木は殆ど無くなり、岩石と水だけの寂しい場所に入るらしい。

アデルは、さっきの巨大トカゲと、あの憎たらしい「ヒル」のことを思い浮かべた。

またおかしい怪物どもが出てこなければいいけど・・・
アデルはいやな予感がして、首をすくめた。

そして、そのアデルの予感、見事に的中することになる。

アデルとデイスパーが、地図どおり何も無い、寂しい道を黙々と歩き始めてからしばらくして、大きな湖のほとりに出た。水は、多少濁っていたもののなんとか飲料水として飲めるようなので、ここでアデルの水筒を満たそうと、荷物を降ろした。

「ふう……やつと広い場所に出れたぜ。村とかの狭い場所は苦手だな」

デイスパーは広い湖の上を低空飛行でゆっくりと旋回しながら、ほととしたように息を吐き出した。

「……よかったね」

アデルはその様子を微笑ましい思いで眺めながら水筒を取り出し、湖のほうに屈み込んだ。固く閉めた蓋を開け、水筒を水の中に押し込むようにして、水を流し入れる……。

アデルの指先が、冷たい水に触れた。

その途端、湖に一つの大きな波紋が、物凄い勢いで広がる。

それと一緒に大きな風も吹いて、辺りをざわめかせた。遠くの森で、物凄い数の鳥達が、一斉に飛び立ったような音がする。

同時にドクン、とアデルの鼓動が大きく波打った。

アデルは瞬時に何かが起こると悟り、同じように表情を引き締めたデイスパーと目配せをする。アデルはあまり音が立たないように、まだ空っぽの水筒を脇に置いた。何が出てきてもすぐに対応できる体勢をとって、身構える……。

どのくらいだったのだろうか。辺りは、全ての音をなくしてしまつたかのように、カタリとも音をたてない。さっきまで優しくそよいでいた風も、木々の葉を揺らすのを躊躇うかのように、いつの間にか、消えていた。

アデルが一瞬、肩の力を抜いた。

「バツシャア！」

物凄い量の水飛沫があがり、アデルは少しの間、なににも聞こえなくなった。デイスパーも同様のようで、混乱したように水飛沫が落ち終わるのをひたすら待つ。アデルの姿も見えていないようだ。

何がなんだか、わからない。

この状況では、何処から怪物が飛び出してきたても、おかしくない。

アデルは不意に、猛烈な恐怖を感じ、デイスパーの姿を必死で探しながら、やみくもに、殆ど無意識に走り出した。途中で、何か固いものを蹴った感覚がしたが、気にならない。時折聞こえる不気味な水の音が怖さを掻き立て、アデルはいつそう足を速める。湖の周りを一周したかもしれない。此処は何もない岩場だから、何処も同じような景色に見える。もう自分が何処にいるのかさえ、解らなくなっていた。辺りを必死で見渡し、さっきの水飛沫が残した霧の中に、目を凝らす。デイスパーの姿は、今だに見当たらない。

怖い怖い怖い怖い怖い

！

次第に浅くなっていく呼吸。焦ってはいけないことは、なんとなく解っていた。しかし、落ち着こうとしても、怖い、という思いが、どうしても付き纏う。肺が急に苦しくなあって、アデルはやむなく足を止めた。心臓の音が、異常に耳に響く。足が小刻みに震えて、立っているのもやっとだ。

その時、しゅるつと、何かが足首を掠めた。

アデルはヒツと小さく声をあげ、また走り出しそうになる。やっとのことで理性を取り戻し、深呼吸を繰り返してから、用心深く足首に触れてみた。触った感触では異常は見当たらないが、アデルは念のために足首に目をやった。その途端、足首を掠めたものの正体が、明らかに変わった。銀色に煌く、縄のような太い糸の固まり。どうやらその糸は、奥のほうまで続いているようだった。アデルは用心しながらその先を目で追っていく。永遠に続くかのように、糸は奥へ奥へと続く。アデルは半ば無意識にその糸のほうへ足を踏み出して

いた。

「クスッ」

全身をくすぐるかのような、不気味な含み笑いが横を通り抜けた。アデルは、足を踏み出したままの状態で硬直し、目だけを動かして笑い声の主を探す。

不思議なことに、恐怖心は少しずつ消えていき、アデルのいつもの五感が冴えてきた。ゆっくりと体勢を立て直し、辺りを見渡す。不意に、背後に何かの気配を感じた。

アデルは瞬時に振り返る。その途端、アデルは驚愕と感嘆で、身体が止まってしまった。

それもそのはず、銀色の糸の主は、上半身は人間、腰から下は、青色に煌く鱗で覆われていて、先のほうに尾鰭が付いている。そう人魚だったのだ。縄のような物は、人魚のとてつもなく長い、髪の毛だった。

銀髪の美しい人魚は、少し離れた岩に腰掛けて、アデルを警戒しながらも興味津々と言った様子で眺めている。

もちろん人魚なんて存在しないと信じていたアデルは、現実逃避をしてしまいそうになったが、すぐに落ち着きを取り戻し、この世にはインプや変身人間だっているんだから、と必死で納得しようとした。その間に、人魚は徐々に警戒を解いたのか、乗っていた大きな岩からスルスルと、まるで人間が歩くように難なく降りてきて、アデルの顔をまじまじと見つめ始めていた。アデルは至近距離で見つめられ、人魚のあまりの美しさに見惚れてしまいそうになったが、無理矢理重い足を動かし、人魚から距離をとる。

人魚は最初、アデルの行動に驚いたようだったが、すぐに悪戯っぽい笑みを浮かべ、信じられないぐらいの速さで再びアデルの目の前に来ていた。

クスクスと、人魚が笑う。アデルの驚いた顔を見て、愉快そうだ。アデルはムツとしたが、人魚の笑い顔に見惚れて、人魚から距離をとるのを忘れてしまった。

「あなた、魔法使いね」

その容姿とはあまりにもかけ離れた、キンキンといやに耳につく声。アデルはその声で、人魚の美貌の呪縛から解かれ、急いで出来るかぎり早足で後ずさる。その間も、人魚から目を離さなかった。

「フフ・・・そんなに警戒しないで」

人魚は今度はアデルと距離をとったまま、楽しそうにアデルを見ながら囁く。

「あなたは、魔法使い。そうでしょう？」

人魚はほんの少し顔から笑いを消し、にこやかな表情とはうらはらに、どこか冷たい目を向けた。

「だったら、なんだ」

アデルは強気な声に聞こえるように努力しながら、人魚の目だけを見ていた。

「あなたが、湖に触れた瞬間、湖全体に波紋が広がったわ。それはあなたが魔法使い、もしくは強い魔力を持った人物だということなの」

人魚は瞬きを繰り返して、アデルをじっと見つめた。

「・・・この湖はね、魔法使いの魔力を吸い取る力を持つてるの。その魔力を使つて、大きくなっているのよ。今も、さっきのあなたから吸い取った魔力で、この湖はほんの少し成長したわ・・・フフ・・・ありがとね」

心底愉快そうに笑う人魚を見て、アデルはゾツとした。もう、人魚が美しいとは思わない。

「だからもし、この湖に落とされたり、間違つて水浴びでもしてしまつたら　あなた、おしまいね。もう魔法なんか、二度と使えなくなるわ。・・・でも今はまだ大丈夫、あなたは指先で触れたただけだから、そんなに身体に変化はないはずよ・・・でも、この先は、更に魔力がなければ通ることを許されない、畏の道。湖に魔力を全て抜かれて空っぽになったら、あなたは、絶対に進むことができない」

人魚は歌うように言って、不気味な微笑みを浮かべながら締めくくった。アデルの反応を楽しむかのように、じっと見つめる。

人魚から聞かされた、あまりに恐ろしい湖の正体に、アデルは顔面蒼白だった。もしもこの湖の水を、水筒に満タンに汲み入れ、それを飲んでいたら？ アデルの魔力が吸い取られ、魔法が使えなくなる。

これが、アデル一人の問題だったら、飛び上がるほど嬉しい事だ。しかし、国王は、アデルの魔力を見込んでこの旅へ行かせた。アデルと、家族の命を守る代償に。魔力がなくなれば、アデルを生かしておく必要が無くなる。そしてアデルを旅へ行かせるための脅しの道具でしかない家族も、もちろん必要がなくなるのだ。

頭の中を、恐ろしい光景が何度も駆け抜ける。

「魔力がなくなるのが嫌なの？」

すうっと、頭の中に入ってくるような、さつきとは違う甘い声。アデルはハツとして、目の前の人魚を見た。人魚はニイツと悪戯っぽく笑ったかと思うと、突然アデルの前から消えた。と同時に、湖の方で、小さく水飛沫が上がる。アデルが目をやると、人魚が肩までを水面に出し、こちらを見ていた。銀色の髪が、まるで水草のように水中を覆って揺れ、きらきらと反射する。顔にはまだ、悪戯っぽい笑みが残っていた。

「あなたは、自分から魔力がなくなるのが嫌なのね？」

人魚が水の中を優雅に泳ぎながら、もう一度、アデルの頭の中で繰り返す。

「どうしようもなく甘い声だ。」

「それはどうして？」

人魚は随分深いところまで行って、アデルを振り返った。アデルは無意識に人魚を睨むように見つめ、拳を握り締めた。

人魚はそんなアデルの様子に怯むこともなく、いずれも楽しそうに眺め、また小さく笑う。

「あなたには、守りたい人がいる。」

そのときアデルは、湖の異変に気づいた。人魚を中心にして、水が

渦を巻き始めていたのだ。人魚は気づかれないようにしているのか、後ろ手で何かを隠すような仕草をしているのが、なんとなくわかる。アデルは深呼吸をして、人魚を警戒しながら、人魚の背後に回ろうとじりじりと足を動かし始めた。人魚は渦を作るのに夢中になっているようで、アデルへの注意が少し薄れているようだった。

「その人を守るために、魔力がどうしても必要なんだわ」
人魚は上の空で続ける。

「……デルツ……アデル！」

アデルは背後の声にビクリと肩を震わせたが、声の主がわかると、人魚に気づかれぬよう、唇をあまり動かさないようにして応答した。
「デイスパー！……状況は、わかるよね？」

「ああ。少し前から、お前とあの人魚の話を聞いていた」

「……人魚は、湖に何かしてるみたいなんだけど、この位置からじゃ手元が見えない。君が飛んでいって、見てくることはできる？」

アデルは後ろを見ずに、呟くように言った。人魚は、気づいていない。

「ああ 任せろ」

デイスパーは、答えると同時に音も無く茂みから飛び出した。

「守りたいものがあると、人は弱くなるのよ。あなたもそうね？」

人魚の声が、頭に響く。デイスパーが、人魚の何メートルか上空に居るのが見えた

「僕は弱くない。あなたが言ったように、魔力を持ってる」

それを聞いた人魚は、待つてましたとばかりに大声で嘲笑った。

デイスパーは、人魚の背後に回り、手元をじっと見つめている。アデルは人魚に気づかれぬように、茂みに背を向けたまま、ほんの少し、身をかがめた。

「魔力なら、私だって持つてるわ。きっと、あなたよりたくさんね」

「……ならどうして、あなたは湖に魔力を取られないんだ？」

アデルは言いながら、すぐ近くにあつた小石を指で引き寄せ、掴んだ。人魚の視線を伺いながら、掴んだ手をさり気なく後ろに持つていく。

こつちの準備はできた。アデルは人魚の背後を盗み見て、こうもりの姿を探した。

「それは、私がこの湖の主だから。・・・湖の主には、湖の弱点が見えるのよ。だから、湖は主の力を吸収できない」

アデルはその言葉で、ほんの少し人魚に関心を戻した。

人魚は笑みを浮かべたまま、しっかりとアデルを見ている。心臓が、びくりと波打った。アデルは一瞬、デイスパーの存在に気づかれたかと思つたが、もう人魚の近くにデイスパーはいなかった。

「湖の主？ 湖の弱点？ 生きてもない湖に、弱点なんてものがあるのか？」

「あるわ。力をもった湖ならね。この湖も、遙か昔はただ自然にできた、普通の湖。それを、あの人が魔法をかけたことによつて力をもち、意志をもったのよ。だからこの湖は、自分の生みの親である、あの人の力を吸収することができない。あの人の力の一部を受け継いだ、この私にもね。偉大なあの方は、孤独だった私に湖の主という居場所を与えてくださった」

人魚は、瞳を輝かせながら、うつとりと宙を見つめ、少しの間、湖にもアデルにも注意をそらした。その瞬間を、デイスパーは逃さなかった。

何処にいたのか、目にも留まらぬ速さで茂みから飛び出し、人魚の喉笛に鋭い牙を立て、アデルに金色の瞳を向ける。人魚の真っ白い喉から、真っ赤な血が飛沫をあげた。しかし、地面におちると、青く変化し、灰色の煙をあげた。アデルはそれを尻目に、人魚の背後に全力で走り、狙いを定め握り締めていた小石を思いっきり投げつけた。小石は人魚の、後ろに組んでいた手に当り、かすり傷を負わせた。それだけでも十分効果はあつたようだ。人魚は突然の出来事に身体がついていかず、思わず動かしていた手を止めた。すぐ

に、人魚の背後に出来つつあった大きな渦が、小さく萎んでいく。アデルは萎んでいく渦を見やり、ほっと顔面に笑みを浮かべながら、デイスパーを見た。途端にその顔から笑みが消える。人魚が力づくで、喰いつくデイスパーを引き剥がし、怒りで恐ろしく歪んだ顔をこちらに向けるところだった。喉から血が流れ出していたが、人魚は気にする様子もない。よく見ると、さっきまで普通だった両手から水かきが生え、爪がどんどん伸びて鋭い刃物のようにになっている。ノーザンビレッジの男達を八つ裂きにした爪だ。アデルは咄嗟に思った。

「おのれ、魔術師の若造が！　よくもこの私を出し抜いてくれたものだ。覚悟しろ！」

物凄い水飛沫と共に、人魚がこちらに迫ってくる。

アデルの頭の中は、真っ白になった。なんとか体勢を立て直したデイスパーが、遠くのほうで何かを必死で叫んでいた。アデルは朦朧とした頭で、その口の動きが、「逃げる！」といっているのをなんとか読みとった。瞬間、ほぼ無意識に足が動き、間一髪のところで人魚の鋭い爪から逃れた。しかしその勢いで、大きな波がまともに全身にかかり、服が水を吸って重くなる。アデルは上着を脱いで、地面に捨て身軽になると、死に物狂いで人魚から遠ざかった。幸い此処は、岩石だらけで隠れるには絶好の場所だった。アデルは一番近い場所にある大きな岩陰に身を潜め、心臓を落ち着かせようと試みた。人魚はすでに次の攻撃体勢になっていて、真っ直ぐにアデルに狙いを定めている。アデルが何か考える前に、猛スピードで突っ込んできた。本能的に身体が反応し、咄嗟にアデルは、湖の方へ飛びだした。

しまった・・・！

そう思ったときには、遅すぎた。アデルは水面にしたかた全身を打ちつけ、そのまま湖に入ってしまったのだ。

「ハハハハハ！　馬鹿な奴だ。自分から湖に飛び込みおって！　魔法が使えなくなると話したばかりなのに。フフ・・・こうなれば

もう何もできまい・・・十分に魔力が吸い込まれてから引きずり出して、たっぷりいたぶりながら殺してやる・・・ハハハハハ！」
アデルが沈んでいくのを、人魚は気が狂ったかのように笑いながら眺めた。

アデルはなんとか意識を保ち、必死に湖から脱出しようともがいていた。しかし、いくら手足を動かしても、水面にたどり着くことができない。焦る気持ちがアデルの身体を動かし、さらに体力を消耗させる。今のところ身体に変化はないが、もうそろそろで湖に力を吸われてしまうだろう。

早く　早く湖から出ないと　　！

不思議なことに、水の中だというのに、アデルの意識は薄れながらも消える気配が全くしない。力を抜き終わるまで、死なせないということか。

水面近くで、人魚の笑い声が響く。異様なほど耳に残る、嫌な笑いだ。

徐々に身体に力が入らなくなる。

数分もすると、アデルは完全な無気力状態になり、諦めてゆらゆらと水底につくのを待った。少なかった酸素はとくに溢れ出し、水面に泡を作っている。息が苦しいとも思わなかった。家族やデイスパーのことが頭に過ぎったが、なんの感情も浮かばない。段々と、瞼が重くなっていく。

僕は、死ぬんだろうか

自分の中で、そうだ、と声がしたように思えた。

横目でちらりと辺りをみると、そろそろ底に着く頃のようなのだ。同時に、身体の奥底の方にあった力が抜けていくような気がし始めた。湖が、アデルの魔力を吸収しようとしている。ゴクリ、ゴクリと、湖が魔力を飲み込む音が聴こえた。幻聴だとわかっていても、おぞましいと感じる。

アデルの心臓が、トクン、と波打った。しばらくして、耳も聞こえなくなっていく。さっきまで響いていた人魚の笑い声も、遙か遠

くで吹く風のようにだ。アデルは、自分はもうすぐ死ぬのだと、確信を得た。

案外、苦しまずに死ねそうだ。そんな呑気な気持ちで、身体全体に広がっていく。

もうなにも感じない　　心臓のリズムが、徐々に遅くなっていく。

そして、最期にひととき大きく波打つと、動かなくなった

第6話 前編

此処は何処だろう？

辺りは真っ青で、他にはなにも見えない。

僕の名前はなんだっけ？ どうしてこんなところにいるんだろう？ 誰かいらないの？

解らないことだらけで、頭が痛くなってきたぞ

ふと、視界がよくなってきた。真っ青だった景色が揺らいで、他のものもはっきりと見える。微かに揺れる水草、大きな岩をびっしりと覆う苔、緑色の小さな魚が、群れになって泳ぐ。それを見て、水中にいるのだとわかった。不思議と、陸上にいるときと同じように呼吸ができる。

もう少したつと、白い砂が一面に広がっているのも見えてきた。

所々に、幾つもの光りが差し込んで、キラキラと反射する。眩しい。思わず目の上に手をかざした。そのとき初めて、自分の腕を見た。白い。死人のように白い腕だった。とても華奢な細い腕。それに赤ん坊の腕のように、短い。

見ているのが辛くなって、腕を下ろした。

そのとき、自分の数メートル先に、人が倒れているのが視界に入った。

確かに人だった。岩と岩の間で、ぐったりと横たわっている。

思ってもいない出来事に、目を見張った。

あれは誰だろう？ もしかしたら、僕と同じように、此処で迷子になったのかもしれない。胸が高鳴る。仲間を見つけたような、わくわくした気持ち、心を駆け抜けた。それと同時に身体がふわふわして、浮くような感覚がはじめた。景色が動く。

気がついたら、その人のすぐ近くに来ていた。

金色の髪の毛の、男の子だった。

しばらくの間、その少年に魅入ってしまった。端正な顔立ち。目

鼻立ちがくつきりしていて、人形みたいだ。長いまつげが揺れる。
女の子のようだけど、きつと男の子だ。

確信に似た気持ちだった。

金髪が陽光に反射して、宝石のように光り輝く。背中に真っ白な羽根が生えていてもおかしくないぐらい、綺麗な少年だった。サラサラの髪と服が、競うように互いに揺れる。

その瞼の奥の瞳を見てみたいと思ったが、あいにく目はしっかりと閉じていた。

そういえば、顔も青白い。薄い唇がほんの少し開いて、まるで空気を吸おうとしているかのようだ。どこかが違う

死んでいるのかもしれない。

そう思った途端、この少年を助けなければ、と半ば使命のようなものを感じた。

自分の短い、赤ん坊のような両手を伸ばし、男の子の背中に差し込んだ。ちよつと力を入れただけで、すぐに身体が浮く。

見た目より、体重が軽いのかもしれない。

そんなことを思いながら、無意識に地面を力強く蹴り、水面に向かって泳ぎだした。陸は、かなり高いところのように思えたけど、段々とスピードがでて、すぐに水面に着いてしまった。

近くに岸を見つけて、そこに少年の身体を横たわらせた。自分も水から出て、陸にあがる。

その途端、身体感覚が、急にはつきりしてきた。

首の上が重い。きつと頭が乗ってるんだ。腕もある。指もしつかり動くみたいだ。

足の感覚もしてきた。しつかりと、地面を踏みしめている。

湿った土の柔らかい感触も、皮膚を伝って感じ取れた。感激で、少しの間ぼうつとしてしまった。無意識に、自分の足に目を移す。そして、またしても自分の醜い身体に肩を落とすことになった。

足は、真っ黒だった。まるで焦げてしまったように、黒い。そして、枝きれのように細いのだ。

溜め息をついて、自分の足から視線をそらした。

とりあえず、歩ける。それでいいか。

辺りは、見たこともない景色だったけど、少年の身体のほうが気がかりだった。すぐに心臓のあるところに耳をあて、動いているか確かめる。心臓は、止まっていた。

しかし諦めきれず、他のところの脈も計ってみる。はたしてどの脈も、動いていなかった。体温も、ものすごく低い。それどころか、どんどん冷たくなっている。

このままじゃ、ダメだ　！

そう思ったとき、自分の両手が明るく光りだしているのに気づいた。驚いたけど、ほのかに温かい、優しい光になんとか安心する。手を広げてみると、光りが強まって、辺り一面を照らし出した。何も考えずに、少年の身体に光り輝く両手を置く。それだけでは足りない気がして、少年を引き寄せ、短い腕を精一杯伸ばして、包み込んだ。少年の身体が温まっていく気がする。小さな希みをたくして、長い間、両手で少年を温め続けた。

「お前……誰だ？　そこで何してる？」

どれくらいたったのだろうか、背後で声がした。

陸に上がったときから、なんとなく気配を感じていたので、あまり驚かない。ゆっくりと、振り返った。小さなこもりが、茂みから顔を出し、こちらの様子を伺っていた。大きな金色の瞳が目立つ。こつもりが喋ったことには驚いたが、相手も自分の容姿に驚いているようだ。とりあえず何か喋ろうと口を開け、パクパクと動かしてみた。微かに音がする。

「……お、お前こそ、誰だ？」

素直に言葉が出てくる。

声は、思ったより澄んでいて、きれいだった。例えるなら、まだ声変わりのしていない、幼い男の子の可愛らしい声。自分が喋ったことに、相手が更に驚いているのが解った。

しばらくの沈黙。

なにも喋らず、静かに互いを見つめる。こうもりを見ながらも、少年を抱く腕の力は弱めなかった。こうもりが、数歩前に出てくる。本当に小さい。

「……そこにいるのは誰だ？」

少年に気づいたようだ。

腕のなかでぐったりと横たわる少年を、じっと見つめている。その視線につられて、少年のほうに目を移した。その途端、驚愕で目を見張った。

なんと少年の頬に赤みが差して、ほんのりと淡いピンク色に染まっている。それに、呼吸の音も微かに聞こえるのだ。慌てて脈を計ってみる。心臓は、正常に動き出していた。

「生きているのか？」

こうもりがすぐ近くまで来ていた。声が、僅かに震えている。こうもりが自分を見たので、しっかりと頷いてやった。こうもりは信じられないというかのように言葉を失い、ただ息を吹き返した少年を見つめるばかりだった。

本当に、生き返ってる。

自分でも信じられなかった。恐らく少年を救ったのであろう自分の両手は、まだ強い光を放ち続けていたが、そと、少年の身体から離してみた。少年がまた死んでしまうのではないかと恐怖が駆け抜けたが、少年は依然しっかりと呼吸を続け、体温も戻りつつあった。

「……あなたが、アデルを助けたのか？」

唐突に、こうもりが問う。戸惑ったが、静かに頷いた。こうもりが、今はもう小さくなり始めた光る両手を見つめる。

「その両手が……？」

頷く自分を見て、こうもりがふっと頬を緩める。きっと笑ったのだ。

「……そうか。それじゃああなたは、アデルの恩人だ」

「……おん……じん」

「そうだ。命の恩人だ」

こうもりが、小さな子を諭すように優しく言う。ムツとするはずなのに、不思議と腹が立たない。

「でも、どうしてこの子が助かったのか・・・知らない」

こうもりは、しばらくこちらをじつと見つめたが、ふと息を吐き出して、口を開いた、

「俺様だってそんなもん、知らないさ。・・・とりあえず、此处は湖の近くで危険だ。もっと茂みの奥に入ろう」

どうして湖の近くが危険なのか解らなかったが、こうもりの真剣な瞳をみて、頷いた。

こうもりはひらけた場所を見つけると、こちらを向いて、此処にしようと言った。頷いて、腕に抱いていた少年の身体を地面にそつと下ろす。少年の意識はまだ戻らなかったが、しっかりと呼吸していることがわかって、ほつとした。すぐに腰をあげて薪を拾いにいこうとしたが、どうやったのか、いつのまにかこうもりの目の前に明るいオレンジ色の炎が暖かく燃えていた。

「薪は、拾いにいなくてもいいぞ」

きょとんして炎を見つめているのを見て、こうもりが言った。

「・・・お前は、魔法使いなのか？・・・なにもないところから、炎をだした」

こうもりが、ゆっくりと振り返る。

「・・・魔法使いではないが、魔法は多少使える。どうしてなのかは、今説明すると長くなるから、また後だ。あと、俺様をお前などという汚らしい言葉で呼ぶな。虫唾が走る。デイスパーだ」

「・・・デイスパー」

「ああ。デイスパー様でもいいぞ」

こうもりが真剣な顔で言った。何かを期待するかのように、返事を待つ。

「・・・僕は、デイスパーと呼ぶ」

途端にこうもりはつまらなそうな顔でふくれ、そつぽを向いた。
「あつそ。ふん！ いいさ。いつだってそうだ。俺様はいつも、どんな下等生物にも呼び捨てにされてきたんだ。まさかお前みたいな何処の誰かわかんない野郎にでさえも呼び捨てにされるとはな。とんだ侮辱だ」

こうもりの態度には驚いたが、なんだか親しみを感じて心の中でクスリと笑った。

「だけど・・・僕、下等生物じゃない」

ぼそりという。デイスパーは、驚いた顔でこちらをじっと見つめる。

「・・・お前、人間か？」

「・・・わからない」

途方にくれて言う。声が震えていた。

「お前は、今までどこに居た？」

「わからない。でも、湖のなかで意識を取り戻した」

「湖？ どういうことだ。水中で息が出来るのか？」

頷く。確かに、湖の中でも苦しくなかったのだ。同時に背中に悪寒が走る。

今になって、自分が誰かわからないことに恐怖を感じた。このこうもりなら助けてくれる気がして、乞うように金色の瞳を見つめる。
「自分はどこの誰で、どういう生き物なのか、性別さえもわからないのか？」

「わからない。でも・・・自分は男だと思う」

「・・・何故だ？」

わからない。本当に曖昧な気持ちだったが、男だと、自信をもっていえる自分がいたのだ。それを、こうもりに告げる。

「・・・ふむ・・・じゃあ、ちょっと立ち上がった」

言われた通りに、立ってみる。少しよろけたが、さっき歩けたのだから、大丈夫。すぐにバランスをとって真っ直ぐに立つことがで

きた。

デイスパーは小さな羽で舞い上がり、頭のとっぺんから足の先まで観察した。

「……お前、自分の容姿をみたことあるか？」

一通り身体を観察し終わり、少し考えた後、デイスパーは唐突に問うた。

静かに首を横に振る。

湖の中で腕をみ、陸で足を見ただけで他の部分は見たことがない。むしろ、見なくなかった。腕といい、足といい、まるで継ぎ接ぎだらけの古びた人形のように、見ていて辛い。

「じゃあ、見てみたほうがいい。それでどう感じるかしだいで、わかるかもしれない」

その言葉に反応して、思わずデイスパーに詰め寄った。

「本当か？ 本当に僕が誰だかわかるの？」

「全てが解るわけじゃない。ほんの少し、お前の情報が手に入るかもというだけだ」

「それでもいい。なんとかなるなら」

「……よし。湖は危険だから、俺様が直々に鏡を出しやる。ありがたく思っただな。じゃ、ちょっとついてこい」

偉そうに言うデイスパー。少年 アデルの様子をちらりとみて、まだ意識が戻らないことを確認すると、デイスパーについて茂みの少し奥のほうに行った。少年には、自分の醜いであろう姿を見せたくなかったのだ。

茂みの中は、意外と通りづらく、枝や棘に引っ掛かつては舌打ちをして枝切れのような指で不器用に外していく。そんなこんなで、デイスパーがいるところまで行くのに、随分時間が掛かってしまった。やっとデイスパーを発見した頃には、とっくの当にまたも何処からか鏡を取り出し、待ちくたびれたというように鏡の縁に頬杖をしていた。

「おっせえぞ。さっさと鏡の前に立て」

いわれたとおり鏡の前に立つ。しかし覚悟が決まらず、目をつぶってしまった。一度後ろに下がり、再度鏡の前に立ってみる。しかし、やはり目をつぶってしまった。自分が本当に醜い姿だろうという直感が確かにあり、それが恐怖へ繋がっていたことに今更になって気づく。何度かそれを繰り返しているうちにデイスパーも痺れを切らしたのか、大きく避けたくちを開いた。

「おい何してんだ。意味ないだろ」

わかってる。そんなのこと、自分が一番解ってる。自分のやっていることが、時間の無駄でしかないことは。ただ鏡を見るというだけで、こんなにも取り乱す自分が不思議で、歯がゆくて堪らない。不意に、涙が出そうになった。

「大丈夫だから、ちゃんと自分に向き合え」

厳しくも、優しくも聴こえる言葉だった。デイスパーがどこか優しげでそれでいて何を考えているのかわからない、不思議な眼差しで見つめていた。その言葉が、眼差しが、快いと感じる。瞼を開け、しっかりと自分を見つめた。

まず、服を着ていた。当たり前のことのようだけど、服を着ている感覚が全くなかったのだ。それが皮膚かのように、自分の身体にとっても馴染んでいた。服には、大きなフードがついていて、顔と頭を隠している。震える手で、ゆっくりとフードを外してみた。顔をみるのは後にして、頭をしてみる。頭には、ちゃんと髪の毛が生えていた。赤茶色の柔らかい髪の毛。首の辺りで、短く切つてあった。髪の毛が普通だったことにほっとしながら、まだ顔を見る勇氣が出ず、胴体を眺めた。身長は、大体十二〜三歳の子供で、体型は標準。しかしやはり腕と足は不格好で正反对だった。後ろを向いてみて、首の右下に何か描いてあるのが見えたが、見るのが怖くて、気づかない振りをする。背中には特におかしな部分は見受けられなかったが、顔を見る覚悟が出来ず、しばらくグズグズと背中を眺めていた。そんな様子を、デイスパーは一言も言葉を発さずに静かに見守っている。

しばらくして前に向き直ると、息を深く吸い込み、正面から自分の顔を見た

喉の奥のほうで、ヒュツとおかしな音がする。自分が息を飲み込んだ音だと、後から気づいた。

それは、見るもおぞましい姿だった。

第6話 後編

右半分は、人間の顔だった。黒い瞳が、きらきらと光を放っている。鼻の頭にはそばかすが散らばっているし、血色のいいピンク色の唇も普通だった。男とも女とも見れたが、とにかく普通の子供の顔だったのだ。しかし 左半分は、言葉に出来ないほどぐちゃぐちゃに崩れていた。もはや、人間の顔かも妖しい。まず、皮膚がなかった。右の顔の皮膚がほんのりとピンク色で健康的なのと対照的に赤黒い肉の筋一本一本が、不気味なほど鮮明に見える。白い骨もところどころ見えていて、痛々しい。そして、口に歯はなかった。あるのは、左右の上下に、鋭い牙が一本ずつ。黄色つぼく変色した牙には、その先端で皮膚を、肉を食いちぎった痕跡が、茶色い無数の染みになって生々しく表れていた。目は狼のように鋭く濁っている、今にも泣き出しそうかのように、潤んでいる。

気づいたら身体中が震えて、地面に膝をついていた。身体が宙に浮いてしまうような、フワフワした気分だ。まだ、この姿を現実に思えない。こんなに恐ろしい光景を、生まれて初めて見た気がした。デイスパーが同じ視線のところまで降りてきて、瞳を覗き込む。瞬きした途端、鏡が目の前から消えた。

「・・・どうだ？ なにか感じなかったか」

荒い息のまま、デイスパーを見て、僅かに首を横に振る。今は、それが精一杯だった。

そうか、と呟くと、デイスパーは目を逸らし、天を仰いだ。

「戻ろう。…悪いな。お前にはショックが大きすぎたようだ」

デイスパーが背を向けたまま、本当に申し訳なさそうにいう。大丈夫だよと言いたかったのに、言葉が出ない。声がなくなってしまうようだ。息を吸ってみて、口の中が乾いていたことに気づいた。もう一度息を吸い込んで、立ち上がる。フードを深く被りなおしてから、デイスパーの後を追った。

アデルのいる場所に帰るとまだ温かい炎が燃えていて、ほんの少し、気持ちが落ち着いた。デイスパーが座るよう促したので、アデルからできるだけ遠ざかって地面に腰をつける。デイスパーはアデルの近くまでいって顔を見つめ、心臓の音を確認してから正面に座った。

「アデルは、いつ目を覚ますと思う？」

しばらくして、口を開いた。デイスパーはぼんやりしていたのか、ビクリと小さく身を震わせ、アデルをちらりと見た。

「……いつ目を覚まして、おかしくない。身体は正常なんだ。しかし魔法のかかった湖にしばらく浸かってしまった。魔力が消えているかもしれないし、体質も変化してるかもしれない」

デイスパーが深刻そうに言った。

「アデルは、魔力をもっているの？」

「……ああ。そういえば、お前はまだいろいろと知らないことがあったな」

「教えて。知りたい」

デイスパーは困惑したように視線を泳がせ、困ったように見つめた。

「俺様もできることなら教えてやりたいが、お前の正体がわからない以上、個人情報ばふせておくべきだと思うんだ。お前の今までの記憶が消えているのは解る。そして、多分一度は死んでいる身体だということも。でも念には念を」

驚愕で、口がだらしなく開く。デイスパーをまじまじと見つめ、嘘をついているわけではないことを確かめた。

「本当か？ 僕は、一度死んでしまったの？」

「多分な。お前の身体を見たかぎりでは。あんな状態で、現在まで生きていられたはずがない。どういうわけでお前が生き返って、この場に姿を現したのか知らんが。お前が一度はこの世から姿を消した者だということはほぼ確信に近い。ああ、もとは人間だろう」

「……そう」

なんだか力が抜けてしまった。心が軽くなったような気もするし、残念なことのような気もする。自分がわからなかった。

「とりあえず、お前は行く場所がない」

デイスパーが唐突に言った。

「この場所で生きていける保障もない。なにを食べるのかわからないし、もしかしたら何も食べなくてもいいのかもしれないが…そう言った事がわからない以上、お前はこの場所から身動きがとれないわけだ。そうだな？」

頷く。確かにデイスパーが居なければ、自分は一人でここに立ち尽くし、またも死んでいたのかもしれない。

「ってことで、少しでも知識のある俺様がいないと、お前はダメなわけだ。…だから、特別にお前の情報が手に入るまで、俺様と一緒にいることを許可しようと思う」

無意識に頷いた。嬉しいことなのだろうが、感情がつかんでこない。

「どうだ？」

デイスパーが顔を覗き込む。思わず顔を背けてしまいそうになったが、ふと気づいた。デイスパーは自分の醜い顔を見ても、表情一つ変えない。普通の人間を見るかのように、自然に見てくれるのだ。その視線が心地よいことに、今頃気づく。

「…嬉しい。とてもありがたいことだ」

できるだけ感情をこめていったつもりだったが、なんとなく棒読みのようになってしまった。さつきより、感情の出し方が不器用になっっている気がする。デイスパーはしかめっ面をすと思ったが、案外優しく頷いてくれた。何か言おうと、口を開く。

デイスパーの動きが止まった。目を見開いて、一点をじっと見つめている。

「アデル　！」

デイスパーが叫んだ。弾かれたようにアデルを振り返る。

一見さつきと何も変わっていないかったが、ほっそりとした腕が微

かに動いている気がした。いや、本当に動いている。伸びきった指がピクリと動き、地面の土を引っかく。一度は力が抜けてしまったが、もう一度動き、今度はしっかりと土を、緑色の草を掴んだ。目を見開いて、じつとアデルを見つめていた。ピクリとも身体を動かさない。いや、動けなかった。一度死んだ人間が、動いている。信じられなかった。

「……アデル」

漏れ出たような、ディスパーの声。憑かれたように、アデルを見つめる

瞼が、ゆつくりと開く。その吸い込まれそうな青い瞳は、穏やかな波ように優しく凪ぎ、辺りを見回すと、自分に向けられた途端、意識が朦朧とする。青い瞳を中心にして、世界がグルグルと回る。吐き気を覚えた。そして、次の瞬間には真っ暗だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9587f/>

空へ present from satan

2010年10月11日18時08分発行